

京都府立大学学術報告（人文）第70号（2018年12月）

ロバート・バートン

『憂鬱の解剖』

第3部 第1章 第2節 第3項 - 第2章 第2節 第1項

岡村 眞紀子
伊藤 博明 訳

第1章 第2節 第3項

愛の誠実なる対象。

美はあらゆる愛に共通の対象である。「藁が噴流を吸い上げるがごとく、愛は美を吸い上げる」[ビベス『靈魂について』3]。徳と誠実さとは強い契機であり、なによりも美しい輝きを添える。特に真摯で正しきもの、紛い物ではなく、真の美から出た清廉な判断であるならそうである。そうなれば、ウェヌスの双子の息子、エロスとアンテロスははいと固く確固たる関係にあるものである。というのも、でなければ、カメレオンに似た、見かけ倒しのお追従者のグナートたちに何度も騙されることになる。グナートたちは、偽りの顔つきと嘘の手つきで、深い愛や博識を気取り、誠実さや有徳、情熱、慎み深さを装うのである。見せかけの申し立ては、時として人心を奪い、好意を誘い、徳の見かけや影で〈ユウェナリス『諷刺詩集』14.109〉人々を騙す、実際、そこには何の価値も誠実さもなく、真実もなく、ただあるのは偽善や狡猾、奸計等のみ。チェリオ・セコンド・クリオーネが公道沿いで出逢った人がそうであったように、彼らは真の友ではあるけれど、この日和見的な時代にあって、真の友を見分けるのも見出すのも難しい。そんなグナートたちは、たいてい偉い人物につき従い、諂い、愛想を振り撒くが、その媚薬まがいは偉い人物の鼻屑に飛び込み、巧みに取り入れた結果、優れた徳、知識、博識ある者、半神、と勘違いされ、権威と榮譽、そして役職を強引に手に入れるようになっていく。しかし、こういった人たちは時として過酷な混迷をもたらし、その混乱は、〈『列王紀上』12の〉レハベアムが相談した国の者たちのように、自らをも他者をもうちのめす。タンドラやその他の作家たちは、愛や嫌悪が媚薬や秘符によって強引に掻き立てられるものかどうか疑いを呈し、カルダーノやマルボデウスは貴石や護符により、占星術師は時間の選択によると考える、等々あるが、それについては改めて[次章で]述べることにする。今の主題の、誠実なる愛の真の対象は、徳、知恵、誠実さ、真の価値、内なる美であり、騙すことなどありえず、強引に掻き立てられるものでもない。愛されるべく、愛に値するあなたであれ〈オウィディウス『恋愛術』2.102〉。愛こそが最たる効能高き媚薬であり、徳、知恵、恩恵をもたらす恩恵、唯一無二の美質、偽りではなく率直で誠実、簡素にして飾

りなく、使徒〔ヤコブ〕が受け取ったような「天から降りてくる」〔『ヤコブの手紙』3.17〕もので、知性、学、言語といったさまざまな才を与えてきた、神から吹き込まれた習性であって、それゆえに人は愛されるものとなり、愛すべきものとなる（『エペソ人への手紙』4.11）。サウルに関して言えば身の丈もあり麗しく（『サムエル記上』9.2）、ヨセフは、その身の美しさゆえにファラオの宮殿で愛された（『創世記』39）。そして宦官の長といたダニエルも然り（『ダニエル書』1.9）、イエスは神と人から愛された（『ルカ福音書』2.52）。さらに特別な愛があって、対話上手、雄弁、知力、誠実さといったもので、これらは人の眼や耳、感情の厚情や好意を自分に惹きつける原動因、いとも抗いがたい磁石である。「イエスが話すと、その返答にみな驚嘆し」（『ルカ福音書』2.47）、「その口から出て来る恵みの言葉に感嘆した」（『同』4.22）。雄弁なる者は人々の心を盗み取るが、もう一人の例としてはオルベウスが挙げられる。何処へと行こうと何処から来ようと、彼は話すだけで人々を惹きつける。甘美な声は称讃を惹き起こし、美しい言葉で語ることのできるオルベウスは、我々と同じ何でもない言葉を使っても、神の精神をもった優れた人間と呼ばれる。同じような原因で、我らが古の詩人たち、詩人たちの元老院と人民もメリクリウスを、雄弁の頭なるゆえ、三美神に対する案内役とし、かのカリタスたちをユピテルとエウリュモネスの娘、天から降りてきた者たちとした。そうでなければ、醜く、身体も歪み、見目醜悪であるけれど、かの心の善き部分が彼らを美しいと名づける。プラトンは〈『饗宴』で〉ソクラテスの美しさを讃えるが、彼ほど苦虫をかみつぶしたような顔つきで、見た目厳しく、寒気立つ人はいるだろうか。多くの哲学者がそうだし、今までもそうだった。ナジアンゾスのグレゴリオスが考えるように、「眼に見えるほとんどの部分は醜く、見えない部分ではとても優雅なのである」（『弁論』28）。知恵は往々にしてコートの下に身を潜める。イソップ、デモクリトス、アリストテレス、アンジェロ・ポリツィアーノ、メラニヒトン、ゲスナーなどは、アルキビアデスの語るシレノスたちで、見た目には非常に不快で洗練されない老いぼれた老人であるが、実はこれほど言葉も簡素に巧みで礼儀正しく、雄弁にして何事にも博学、穏やかで控えめな人たちはいない。同時代の人でアルキビアデスほど美しい人はいず、ボエティウスが述べたように、表面は見た目にとっても美しかったが、中身はととても醜かった（『哲学の慰め』43）。誠心、徳、麗しい人格は、大いに才能ある者を魅惑し、人々の厚情、好意を得るに資する。クルティウスの〈『アレクサンドロス大王の事績について』の〉アブドロミノスは引き籠りがちな人柄からくる（というのも自分の庭で庭仕事しているのを目撃されている）謙虚さや自制心のせいで貧しい男だが（作者も「彼の赤貧は自身の高潔さゆえ」と書き足している）、誰よりも他人から挨拶され、同時代の誰よりも最良にあずかった。「黄金の目立った深紅の上着が彼に着せられ、身体を洗い、立派な人なのだから王の身の品位と精神とを身に着けるよう」（クルティウス）、それでいて自制心やその他の良い処は維持するようにも言われた。かの高貴なるローマ市民たるティトゥス・ポンポニウス・アッティクスは、いとも麗しい人格で甘美なる身のこなしであったので、市民たち誰からも好かれた。カエサル、ポンペイウス、アントニウス、キケロといったさまざまな党派の人たちにも好かれ、「ただ善良だというだけで多くの遺産を相続した」（コルネリウス・ネポス〈『アッティクス伝』〉）。「富以外は蔑む諸君、

それで金持ちになれるのでなければ徳に何の価値も認めぬ諸君」とリウィウスは声を大にして言う、「クインクティウス・キンキナトゥスは4エーカーしか土地を持っていなかったが、元老院に認められてローマの臨時執政官に選定されたことは傾聴に値する」。その秀でた資質ゆえに同様の記述がなされている者には、大カト、ファブリティウス、アリストイデス、アントニヌス、プロプスがいる。勇猛さで称讃されたカエサル、トラヤヌス、アレクサンドロス大王も然りであった。エペスティオンはアレクサンドロスその人を愛したが〔クルティウス〈プルタルコス『英雄伝』「アレクサンドロス」47.5〕、パルメニオンは王としての彼を愛した。「ティトゥスは人類の歓び」と書いたアウレリウス・ウィクトルは、ティトゥスを彼の時代の愛し子とした。それは丁度、エドガ・エセリングがその徳の高さゆえにイングランドで慈まれたのと同じである。ティトゥスもエセリングも記憶が褪せることはなく、生きていたときも亡くなってからも、幾久しく愛され続けるのである。「麗しい思い出を遺してくれた」とリプシウスは友について語った。生きても死しても、彼らは一心同体の友だったのである。「ご存知のように、私は、大いなる知性、人並みならぬ正直さ、誠実さ、麗しい人柄ゆえにマルクス・ブルータスをずっと愛していた、それに〔プラトンが『パイドン』〈正しくは『パイドロス』250 D〉で言うように〕徳ほど美しく愛すべきものはないと私は思っている」と、キケロはドラベッラに書き送った〔『書簡集』第8巻、9.14〕。「私は真に強くカルウィシヌスを愛している」とプリニウスはソッシウス宛に書いている。「非常に勤勉、雄弁、高潔な男で何から何まで私と馬が合うのだ」〔『書簡集』第4巻〕。この感情は、彼の善き部分から生じている。かつまた、聖アウグストゥスは『詩篇註解』(84〈正しくは64〉)で、「義の特別な美しさがあり」(それは内的な美である)、「それは心の眼で見、愛で、愛することができる。殉職者に見られるように、たとえ身体は野獣に引き裂かれようとも、その美しさは輝き、その徳を我々は愛するのである」と註解している。ストア派は、賢い人間だけが美しいと考え〔リプシウス『ストア派の自然学要覧』第3巻第17論議〕、カトは、キケロの『善と悪の究極について』(第3巻)を引用して、心の容貌は身体の容貌よりずっと美しい、比べるべくもないほど遥かに凌いでいる、と同様の議論をする。クセノボンに拠れば、とりわけ知恵と勇猛さは美の名にふさわしく、それを有する人を美しいと呼ぼせる。アウグスティヌスも言うように「キリスト教徒の真は、ギリシアのヘレナにもまして比類なく美しいのである」〔『書簡集』40〕。「葡萄酒は強い、王は強い、女は強い、だが真はそのどれよりも強く」(『第1エズラ記』3.10, 11, 12)、「知恵を見出し、理解力を得た人は幸いである、なぜならそれによって得る益は銀より優れ、その収益は金を凌ぐから。それは真珠より貴く、あなたが望むべくもない何をもってしてもそれに比べること得ず」(『箴言』3.13, 14, 15)。もう一度言うが、賢明で真、義、高潔、かつ善良なる人だけが美しいのである。スコットランド生まれのフランス王妃、ルイ11世の妻マグダレーヌは、ある夜侍女たちと出かけたところ、王の付司祭の一人で誰からも好かれぬ馬鹿な老アランが、四阿ですっかり眠り込んでいるのを見つけ、甘い口づけをした。若い侍女たちはそれを見て嘲笑ったが、彼女が抱擁し敬ったのは人間としてのその男ではなく、彼の魂の神々しい美をプラトンの愛でかき抱いたのだと、マグダレーヌは応えた〔フランシス・ベルフォレスト『スコットランド教会史』「1430年」〕。

このように、どの時代にも、徳は崇められ、讃えられた。徳からは比類なき光が生じ、徳の研鑽をつめば積むほど、人はより恵みに溢れ、より称讃されるのである。この地上において、キリスト自身ほどに後に付き従われた者は存在しなかった。詩篇作家が『詩篇』第44章第3節で述べているように、「彼は人の子たちよりも美しかった」。『マタイ福音書講話』第8章におけるクリュストモス、『説教』第1番「あらゆる聖人について」におけるベルナルドゥス、アウグスティヌス、カッシオドルス、『マタイ福音書註解』第9章におけるヒエロニムスは、それを彼の人格の美として解釈している。すなわち、彼の相貌には神聖な威厳が具わっており、それは光源のように輝き、万人をそれへと惹きつけたのである。しかし、バシレイオス、『イザヤ書』第53章についてのキュリロス『ヨハネ福音書註解』第5章第2節、テオドロス、そしてアルノビウスなどは、それを彼の神性、義、恩寵、雄弁の美であると解釈している。『詩篇註解』第44番におけるトマス・アクィナスは両方として解釈しており、同様にバラダスト、『イエスとマリアの美について』におけるペドロ・デ・モラレスも解釈している。モラレスはそこにヨセフの美を加えており、聖母マリアについては、クマエのシビュラの予言に従って、こう述べている。

彼女は美しさにおいて他のあらゆる者を凌駕するだろう。

それらが現存しようと不在であろうと、我々の近くであろうと遠くであろうと、この美は輝き、人々をはるか遠くから惹きよせて、それを訪ねるようにする。プラトンとピュタゴラスは、エジプトの賢い神官たちに会うために祖国を離れた。アポロニオスは、マグスたち、ブラフマンたち、裸体行者たちと意見を交えるためにエチオピアとペルシアを旅した。シバの女王はソロモンを訪ねるためにやってきた。そして、ヒエロニムスが述べているように、多くの人々が、雄弁なりウィウスを見るために、千マイル離れたスペインからやってきた『ウルガタ聖書』「序文」。「多くの人々はローマに向かって、美しい都市、あるいは都市と世界の覇者であるオクタウィアヌスではなく、ただ一人の者を訪れて、話を聞くためにカディスから歩みを進めた」[リウィウス像への銘(正しくは異なる)]。徳にも増して、いかなる美もこのような印象を残し、深く感銘させ、人々の心を緊密に結びつけるものは存在しない。

神々に誓って、いかなる画家も
いかなる彫刻家も、徳が有しているような美を
造りだすことはできないだろう。

[ギリシアのストバイオス『命題集』]

いかなる画家も、いかなる版画家も、いかなる彫刻家も、徳の光輝を、それから発するあの驚嘆すべき光線を、後代の者たちを惹きつけるあの魅力的な光線を、世界の終わりまで続くあの永遠の光線を表現することができない。フォウオリヌスが述べているように、若い頃のアルキアピデ

スを愛し、讃嘆した多くの人々は、大人になったアルキビアデスのことが分からず、愛することがなかった。今や、彼らはアルキビアデスを眺めていても、他に探すのだった。一方、ソクラテスの美は常に同一であり、徳の光輝はけっして消えず、常に新鮮で瑞々しく、その後の世代すべてにとっても常に生きており、もっとも惹き寄せる磁石で、現前にあるものを惹きつけ、結びつける〔ソリヌス〈『記憶すべき事柄について』1.72〕〕。この理由のゆえに、おそらくホメロスは、三美神を結びつけ、手と手を取り合っている形姿に造ったのである。というのは、人々の心は、このような美によって堅固に結びつけられているからである。「おお、このように幸福に結びつける、甘美な絆よ」とセネカは叫んでいる。「この絆によって縛りつけられた者たちは、縛った者たちを愛し、そのうえ、より強く縛りつけられることを、そして、多くのゲリュオン〈三頭三身で翼のある怪物〉のように、一つのものへと結びつけられることを欲する」。というのは、真の友愛の本性とは、互いに愛されながら、一つの精神へと結合されることだからである。ある詩人が述べているように〔スタティウス〈正確には、シリウス・イタリクス『ポエニ戦役』9.406-407〕〕、

二人は、同じものを欲し、同じものを欲せず、
永遠に精神は満ち足りている。

常に同一のものに留まり続ける。そして、この愛が生じるころには、平安と静穏、真の照応、完全な友愛、誓願と願望の調和、同じ見解が存在し、それは、ダビデとヨナタン、ダモンとピュティアス、ピュラデスとオレステス、ニュススとエウリュアルス〔ウエルギリウス『アエネイス』9〕、テセウスとペリトスの間に存在したもので、彼ら是一緒に生き、そして死のうとして、お互いに善意を施そうとしている〔アウグスティヌス『告白』4.6〕〕。というのは、彼らは愛において凌駕されることを最大の恥辱と見なしたからであり〔プリニウス〈『書簡集』4.1.5〕〕、彼らは、生きてるときだけではなく、友人が死んだときもまた、墓碑と記念碑、弔歌、碑銘、哀歌、銘文、ピラミッド、オペリスク、彫像、図像、絵画、伝記、詩、年代記、祭儀、記念祭によって、そののち、長い間（プラトンの学徒たちが行なったように）法要を営み、そして、彼らの名前、名誉、永遠の記憶を維持することになるような善き務めを欠かすようなことはない。プリニウスがローマの一市民について記録しているように、「彼は、友人を色彩、蠟、真鍮、象牙、大理石、金と銀において表現し、友人の死のあとすぐに、大聴衆の中で、一卷の書において彼の生涯について語ったのだった」〔『書簡集』4.68〕〕。別のところで、プリニウスは、マルティアリスが彼を称讃するために作成したエピグラムについてこう語っている。「彼は私に、彼にできる限りのものを、もし可能ならば、それ以上となるものを与えてくれた。ところで、人間は、名誉、栄光、永遠性以上のものを与えることができるだろうか。しかし、彼がたまたま書いたものは——彼は残存するように書いたのだが——残存することはないだろう」〔『書簡集』4.61〕〕。貧しい学徒にとって、恩義のある保護者、マエケナス、友人に対して行なうことができる返報とは、自著において名前

を献じ、伝記を記すことなどであり、それは我々の詩人、弁論家、歴史編纂家がすべて行ってきたことである。そして、このような者たちが自らの敵対者たちに対する最大の復讐とは、彼らを諷刺、毒舌などで悩ますことである。そして、プラトンから我々が理解しているように [[『法律』13]、これが二つの最大の機会である。パオロ・ジョーヴィオは、彼の高貴な庇護者である、教皇レオ10世の生涯と事績の第4巻において、次のような言葉を結語としている。「私は彼のことを、他の裕福な人々が行なうように、同様な努力、愛情、敬意によって称讃することができないので、彼の生涯について記そうと思いたちました。というのも、私の財産では、私がより豪華な記念物を構築することが適わないので、私は彼の聖なる灰に対してそのような供犠を果たすことにしました。それはおそらく、小さくはありますが、豊かな才知が提供できるものです」。閑話休題。この真の愛が欠けているところでは、確固とした平安は存在しえず、歯から外に出た偽りの友愛が、あるいは、ある者たちにとって、長らく敬意で偽装されてきた友愛が、それらの目的を叶えるまで存在するが、それらはあらゆる些細なきっかけによって突如として、敵意、公然の闘争、不信、遺恨、中傷、誹謗、競合、そして、あらゆる種類の苦い憂鬱な不満へと転じる。そして、愛の対象として、偉大さ、富、権威などしかもっていない者たちは、愛されるよりもむしろ恐れられる。「彼は誰をも愛さず、誰からも愛されない」〈ユウエナリス『諷刺詩集』12.130〉。そして、しばらくは耐えていても、彼らの残忍と圧制、貪欲、強欲、卑しい頑固さ、狂気、放縦、無思慮、そして同様な悪徳のゆえに、彼らは次第に、あらゆる者から、神と人間の両方から憎まれ、嫌われるようになる。

妻も子も、おまえが元気なのを望まない。

隣人たちはすべて、おまえを嫌っている。

〈ホラティウス『諷刺詩集』1.1.84-85〉

妻と子どもたち、友人たち、隣人たち、全世界が彼らを見放し、喜んで取り除くだろう。そして、むりやり何度も、彼らを荒々しい手に委ねるだろう。あるいは、神の裁きが彼らに下るだろう。彼らには三美神の代わりに復讐の女神が訪れる。こうして、知恵に長けた女性、美しいアビガイルがダビデに迎え入れられる一方で、ナバルは卑俗で、悪に染まっており、それゆえに拒絶された [[『サムエル記』25.3]。モルデカイが歓迎される一方で、ハマンは処刑された。[クセルクセス王の] お気に入りだったハマンは、「他の諸公たちの上に自らの座を与えられ、彼に対してはすべての従者が、門のところに立ち、膝を折り曲げて、崇拜した」 [[『エステル記』3.2]。このような偽善者たち、このような姑息な狐たち、彼らは長らく栄え、そして、世間の目を追従と賄賂によってかすませ、そして、彼らの策略をすぐには理解できない、他の者たちの弱点によって欺いていたが、最後には彼らの正体が見分けられて、一瞬のうちに突き落とされることになる。ダビデが『詩篇』第73篇第1節で述べているように、「たしかに、あなたは彼らを滑りやすい道の上に置きました」。多くのセヤヌスたちと同様に、彼らはゲモニアの階段へと降りることにな

る。そして、エウセビオスと同様に、アンミアヌス〔・マルケリヌス『歴史』14〈正確には22.3.12〉〕によれば、大きな権威の内であったが、皇帝の命令によって、突然、真逆さまに放擲されたが、それと同じように、彼らが逃れて、身元を露わにされたまま最後を迎えたと仮定しても、彼らの死後、彼らの記憶は、消えさる蠟燭の一瞬の異臭のような匂いを放つだけだろう。そして、彼らが生きている間は、彼らに対して不平をもらすことさえなかった者たちも、彼らの名前を諷刺、中傷やより激しい呪詛によって追訴するだろう。彼らは続く時代すべてを通して、悪い評判をとり、そして、世界の終わりまで憎まれる運命にある。

第3節 第1項

快適、有用、誠実、三種すべてからなる^{カリタス}愛。

有用、快適、誠実から出るこの愛以外に、(ひとつの善き特性は同様に別の善き特性を求めるものだから)自然の法、あるいは規律、哲学から出る愛がある。しかし、有用、快適、誠実の三つすべてからなる愛もある。それは^{カリタス}愛であり、敬愛、情愛、仁愛、友愛、その他あらゆる有徳の習性を含む。というのも、愛は他の全ての感情の周転円だからであり、それについてはアリストテレスが『ニコマコス倫理学』で詳しく述べている。それは神によって命じられ、キリスト者、回心した者のみ果たすことのできるもの、すなわち「何にもまして神を愛し、わが身のように隣人を愛すること」(『マルコ福音書』12.29-31)である、愛は燃やし燃やされるランプ、照らし照らされ、ともに分かち合う光だからである。それ以外の愛の対象は麗しく、血縁、同盟、友情といった、国家、自然、富、快楽、榮譽等の道徳的な事柄ゆえの愛は、とても美しいと言わねばなるまい。これらについては、アリストテレス(の『ニコマコス倫理学』[第8-9巻])に広汎に読むことができる。人は人によって愛される、そのことにより人といえる。だが、聖霊から出てくれば、それはすべからず非常に卓越し大いなるものである。聖霊は宗教に真に触れさせ、神に関わるからである。本性はあらゆる生き物に幼いものを愛させる。子どもを育てるために雌鶏がライオンに立ち向かい、雌鹿は牡牛と、雌豚は猪と、愚かにも雌羊は狐と戦う。その同じ本性が人間には親を愛させ、「(父上、もしも、私^私があなたを自分の眼以上に愛することがなかったなら、すべての神々が私を憎まんことを)」[テレンティウス『アデルフォ』4.5(700-701)]。しかも、キケロが言うように、「嫌悪に満ちた悪事でもなければ」[『友愛について』(8.27)]この愛は決して解かれることはない。だが、神の命はさらに深く、親子の愛や従順を命じている。「兄弟愛は大いなるもの、石を一つ取り除けば全体が崩れる石のアーチのごときで」[セネカ(『倫理書簡集』95.53)]、いかなる愛もこれほど堅固、強力で、変節なきものはない。このように三拍子そろうのは自然と運命と徳とが幸いにも一致して作り出すもので、滅多にないものだ。

——国のために死ぬことは麗わしく美しい。

〈ホラティウス『カルミナ』3.2.13〉

「国というその一つの名が、いかに多くの愛^{カリタス}を含んでいるのかを、表現することはできない」
[キケロ〈『帰還後のローマ市民に』1.4)】。

称讃への愛と国への愛はともに、見返りを求めてのもの。

デキウスたちは自らを捧げ、ホラティウスたち、クルティウスたち、スカエウォラ、レグルス、
コドゥルスは祖国の平和と繁栄のために身を捧げた。

一日でファビウス家はことごとく戦いへと追いやられ、
一日で戦いのただ中へ送り出されて滅び去った。

[オウィディウス『祭暦』(2. 235-56)]

五万人のイングランド人が、バツテル大修道院の近くで、祖国を護り自ら進んで生命を落とした。
他の者たちのために死すべく、手に手に絞首索を持ってイングランド王のもとに来た、カレの6
人の議員たちのことを語っている書もある（パオロ・エミリオ〈『フランク族の事績について』
第6巻〈正しくは第9巻〉、[メィア『フランク族の年代記』第12巻「1347年の項」]）。この愛は、
多くの作家たち、歴史編纂家、医者などに、少なくとも、自分たちが市民の平安のため、国の
利のために振る舞っているかのごとくみせかけるべく、苦勞して書くことになった。「友愛の聖
なる名は、友の聖なる互いの絆」[キケロ]、「太陽が天にあるごとく、友愛が世界にある」[ルキ
アノス『トクサリス、すなわち友愛』]、極めて聖なる天の絆として。結婚の愛が人を創るように、
友情は人を完全にし、もしコルネリウス・ネポスの判断を支持するなら、友愛においては氣質が
似ていることの方が血族関係より価値がある [『アッティクス伝』]。愛の絆は他のいかなる花冠
より堅く結びつける。愛を取り去ってみたまえ、そうすれば楽しみも、歓びも、慰めも、倅せも、
真の満足も、すべてこの世から消え失せるだろう、それほどに愛は大いなる絆であり、最も確か
な証文、強力な縛り、今日のウェルギリウス、我らがスベンサが断を下しているように、他のも
のにまして遥かに好まれるのである。

その問題は難しく、判するも難し、
三種の愛がみな揃ってまみえるとき、
力の極みで心を分割すれば
天秤ばかりが何処に下がるか知ることは
愛しい親族への心深き情愛か
女性への愛の燃える火か、
はたまた、ふさわしい徳と結ばれた友への熱情か。

気高き心は最も確かなものと結ばれるべしと我は思う。

なぜなら、肉親の情愛はすぐに収まり、

クピドのもっと大きい炎で消されてしまうが、

誠実な友愛は両者を凌ぎ、

永遠の名声を憧れる思いから、

すべてを制する修練で抑える。

魂が地上の土くれを治め、

肉体の仕事すべてを形創るごとく

魂の愛は肉体の愛を凌駕する、

純金が最も卑しい真鍮に優るのと同じように。

『妖精の女王』第4巻第9歌第1・2連』

心変わりせぬ友は黄金より良きもの [『シラ書』〈『集会の書』7.18〕 [プルタルコス〈『多数の友人について』〕、惨めな思いへの業、唯一の財産 [クセノポン〈『ソクラテスの想い出』2.4.1.〕、だが、この相互的で英雄的な友愛、すなわち有益、快適、誠実と三者揃った愛は、もし、キリストに照らされた魂から出でたものでなく、秩序正しく神に向かい、神のために為されたものでなければ、何の価値もない。「私が預言者の才を有し、人と天使両方の言葉で話したとて、貧しき者たちを自分の財をはたいて養い、身体を焼かれるに供するとて、この愛がなければ、自分にとって何の益もない」(『コリント人への第1の手紙』13.1, 2, 3.)。愛なくば輝かしき罪にすぎない。これはすべてを包み込む愛、神へと化する愛、浄化され純粋な聖なる愛、あらゆる愛の精^{クリテシス}髓、真の賢者の石、アウグスティヌスが言うように「人の友愛は、まず真理自体に由来するものでなければ、真なるものにはなり得ない」[『書簡集』52]。神の真理を愛さぬものは真の友ではないのである。従ってこの愛は真の愛、死すべき人間にとってのあらゆる善きものの源、すべての生きとし生けるものを融和し、永久の親和と堅き盟約に接合し、もはや苦悩、憎悪、悪意に耐えることなく、晴天も雨天も、光も闇も、不毛も豊穡も等しくなる。天に太陽があるごとく、世界に愛がある、と私は言おう。そういうわけで、この愛は何も付加する必要のない愛、卓越せる愛、神の愛にして、人の愛なのである。「神の愛は人の愛を生み出す、そして、この隣人の愛により神の愛はいや増し、深まる」[グレゴリウス1世〈『道徳論集』7.10]。愛のこの幸福な合一により「すべての善く治められた家族と都市は結合され、そこに天も合わさる。かくして聖なる魂は複合のものとなり、世界はそれ自体で成り立ち、そこに含まれるものはすべからく神と接合し、一に集約することとなる」。そして「この愛は真の絶対的な徳、生命、霊を生ぜしめ、あらゆる徳深き行為の根となり」[ピッコローミニ〈『疾病普遍哲学』7.27]、「栄華に終止符を打ち、苦難を和らげ、あらゆる本性的な厄介、不都合を正す」。それは信仰と希望とによって支えられ、信仰と希望は、我らの愛と併せてほどこことのできぬ編み目、ゴルディオスの結び目、正三角形となるが、「その三者のうち一番大いなるものは愛である」(『コリント人への第1の手紙』13.

13)。「愛は、神の熱で我らの魂を燃え立たせ、自ら燃えることで浄化され、浄化されて神のもとに昇り」[ピッコローミニ〈『疾病普遍哲学』]、「贖罪を果たし、わが身を神と和解させる。人の魂を、あのもう一つの愛は毒し、この愛は清める、そして、あの愛は落胆させ、この愛は育てる、あの愛は煩労や困難を、この愛は心の静謐さをもたらす。あの愛は我らの人生を形作り、この愛は損なう、あの愛は悔悛に繋がり、この愛は天国に繋がる」[フレルヴォのベルナル『雅歌についての第5説教』]。というのも、もし我々が一旦この愛^{カリタス}と真に関わり接触したなら、我々が命じられてあるように、何より神を愛するように、また自分のように隣人を愛するようになるはずであり（『マルコ福音書』12. 31、『マタイ福音書』19. 19）、その務めと実践を、善きキリスト者としての行為をすべてなすようになるのである。

「この愛は長く耐え、慈悲深く、妬まず、自らを誇らず、高ぶらず、欺かず、自分のものを求めず、怒りに身を任せず、悪しきことを考えず、不正を喜ばず、真実を喜ぶ。それはすべてのものに耐え、すべてのものを信じ、すべてのものを望む」（『コリント人への第1の手紙』13. 4, 5, 6, 7)。「それはすべての不正を覆う」（『箴言』10. 12)。「それは多くの罪を覆う」（『ペトロの第1の手紙』4. 〈8〉）。わが救世主が『福音書』の中で、彼の足を洗った女性に語っているように、「彼女は多くの罪を赦された、というのは、彼女は多くを愛したからである」（『ルカ福音書』7. 47)。「それは孤児と寡婦を護るだろう」（『イザヤ書』1. 17)。「それは復讐を求めないだろう、すなわち、悪に思いを馳せないだろう」（『レビ記』19. 18)。「それは、命じられているように、同胞の牛が迷っているときには家に連れていくだろう」（『申命記』22. 1)。「それは悪に抵抗し、求める者に与え、借りる者に背を向けず、罵る者たちを祝福し、敵を愛するだろう」（『マタイ福音書』5. 〈42, 46〉）。かくも愛する者は、人々をもてなし、聖人たちに必要なものを分配し、もし可能ならば、すべての人々と友好を保ち、「敵が飢えているならば食べさせ、喉が渇いているならば飲ませるだろう」（『マタイ福音書』12. 16)）。彼は7つの慈悲の業を行なうだろう。「彼は身分の低い人々と自らを等しくし、喜ぶ者たちとともに喜び、泣く者たちとともに泣くだろう」（『ローマ人への手紙』12. 〈16, 15〉）。「彼は隣人に真実を話し、親切で優しい心もち、「神が赦したように、キリストによって他の者たちを赦すだろう」（『エペソ人への手紙』4. 32)。「彼は一つの見解をもつようになるだろう」（『ピリピ人への手紙』2. 2)。「彼は慎ましく、従順で、長く耐え、我慢し、忘れ、赦すだろう」（『コロサイ人への手紙』3. 12, 13)。「彼が行なうことは、人間ではなく神に向けて、心からなされるだろう」（『コロサイ人への手紙』23)。「彼は憐れみ深く、へりくだり」（『ペトロの第1の手紙』3. 〈8〉）、「平安を求めて、それに付き従うだろう」（『ペトロの第1の手紙』〈11〉）。彼は同胞を、言葉と舌ではなく、行為と真実において愛するだろう（『ヨハネの第1の手紙』3. 8)。「そして、神を愛する者をキリストは、神から生まれた者として愛するだろう」（『ヨハネの第1の手紙』5. 1)）。このように、我々は自ら進んで行なわなければならない——もし我々が、この慈愛の、すなわち神的な愛の一部を真にもっているならば、もし我々が、我々に命じられたこのことを果たし、すなわち、忘れ、赦し、そして愛についてのキリスト教の戒律に自分自身を整えるならば。

もし天上を支配する愛が
あなたがたの魂を支配するならば
人類はなんと幸福なことであろうか。

[ボエティウス『哲学の慰め』2.8.28-30]

我々が天使的魂であるならば、なんと祝福され、幸福であり、愛に満ちていることか。我々は悪に打ち克ち、地上にもう一つの天国をもっていることか。

しかし、我々はこのことを行なうことができない。そして、我々のすべての苦悩、悲哀、不満、憂鬱の原因は、この慈愛の欠如である[バシリウス『修道士たちの慣習について』第1説教]。我々が、お互いに強制し、侮蔑し、侮辱し、悩ませ、苦しめ、妨害し、相手を酷使し、怒らせ、罵り、嘲り、中傷し、攻撃し、憎悪し、罵倒するのは（我々が、心が頑なで、無情で、意地悪で、気難しく、無慈悲なので）、我々の欲望と個人的な衝動を満足させて、その結果、ささいな、つまらぬ、見当違いな機会を捉えて、我々自身を、財産を、友人たちを、好機を使い果たし、我々の敵に仕返しをし、敵と敵の所有物を破滅させるためなのである。我々の骨折り、実践、仕事のすべては、いかにして災厄をたくらみ、計略し、対抗し、防御し、攻撃し、我々自身を護り、他人を傷つけ、万人を害することに存する。あたかも我々は厄災をもたらすために生まれてきたかのようであり、しかも、熱心さと辛辣さ、怨恨と激怒と忿怒が強く、我々の計画を遂行し、いかなる類縁性も血族関係も、神や人間への愛と恐れも我々を抑えることができないほどであり、いかなる満足も、いかなる和解も受け容れられず、いかなる人力も服従も役に立たない。我々の敵が、ホメロスにおいて、サルベドンがグラウコスに対して行ったように（『イリアス』16.497ff）、跪いて、自らの誤謬を認め、眼に涙を湛えて降参し、赦しを請うたとしても、我々は心を和らげることなく、赦さず、忘れない——我々が彼と彼の所有物を破滅させ、いわば、「彼の骨から散骨をつくり」、彼を獄につなぎ、彼の友人たち、彼の追従者たち、そして、彼の出自である「憎い一族すべて」と、彼の子孫たちすべてが追放されるのを見るまでは。我々は人間という怪物、犬、狼、虎、悪鬼、肉体をもつ悪魔なのだから、ただ争い、虐げ、我々自身を専制君主にするだけでなく、また多くの燃え木のように、他の者たちをけしかけ、鼓舞するのである。我々の生涯は永続する闘い、争い、仕組まれた戦闘、混乱の激発であり、女神エリスは、我々の天幕の下に住まい、「万物は争いから生じ」[ヘラクレイトス]、才知には才知が、富には富が、力には力が、運には運が、友人には友人が対立し、海戦におけるように、我々は自らの船の腹をさらし、あるいは二つの石臼を不断に摩耗させながら、自分自身を燃やし、あるいはお互いの背骨を折り、そして両者ともに破滅し、最後には消滅する。惨めな哀れむべき我々は、自分自身を太らせ、富ませるために、いかにして我々が得るのか、「いかなる方法によって金銭を得るのか」〈ホラティウス『書簡詩』1.1.66〉、いかに多くの人々を我々は滅ぼすのか、誰の破滅と没落によって我々が立ち上がるのか、誰を——孤児たちを、寡婦たちを、普通の市民たちを——傷つけているのかに

気遣うことなく、我々自身の個人的な欲望を満足させている。我々は、無数の財を、豊かな富と宝を持っており（無情で、冷淡で、残酷で、最高度に無慈悲にも）、そして、貧しい同胞が困窮し、きわめてひどい病気で、食物の欠如ゆえに飢えに苦しんでいても、狐が猿に、自分の尾を地面に引きずったままで、それで自分の臀部を覆うよりも、むしろ無駄に使ったほうがよいと述べたように、我々は犬、鷹、猟犬、不必要な建物に散財し、豪華な衣裳をまとって飽食し、すなわち財を消失させ、同胞にその一部を分け与え、彼を救うよりも、むしろ彼が持っているわずかなものも彼から奪うのである。

飼い葉桶の中の犬どものように、我々自身はそれを用いないが、他人にも使わず、享受せず、我々が生きているかぎりは何も分かち与えず、家政を整えることも、物事を秩序立てることも怠り、我々が死んだ後に全世界に騒乱をもたらす。貧しいラゾロは、わずかなパンの小片のために玄関に横たわって泣き叫び、彼はただパンの外皮とくずだけを求めているのだが、彼を吠え、泣き叫び、飢えるままにせよ、そして彼には自分の肉を食べさせよ。彼に誰の関心も惹かすな。貧しい零落した者が、楽しみの中にある親類の一人と出会い、急いで駆け寄り、帽子をとって、以前の友情、姻戚関係、血縁関係、叔父、従兄、兄弟、父によって懇願する。

この涙にかけて、そしてあなたの右手にかけて、私はあなたに請います、
もし私が、あなたの意に合ったことがあったならば、あるいは、あなたに、
私が愛おしいと思ったことがあったならば、私に憐れみをかけてください。

〈ウェルギリウス『アエネイス』4.314-319〉

あなたがキリストのゆえにいくらかの憐れみを、病人や老人への憐れみを示しても、彼が意を用いることはない。（加えて）病氣、四肢や財産の不可避な消失を主張しなさい。保証契約、あるいは難破、火災、共通の災厄を訴えなさい。あなたの欠乏と不完全さを示しなさい。

たとえ彼が、聖なるオシリスに誓って、こう言ったとしても、
「信じてください、嘘ではありません、酷い方々だ、歩けない私を起こしてください。」

〈ホラティウス『書簡詩』1.17.60-61〉

誓うこと、抗うこと、神とその天使たちすべてを証人とすることは、「見知らぬ者に尋ねよ」〈同1.17.62〉。あなたは偽りの不具者、詐欺師であり、彼はそれには関わらない。「貧しさはどこでも貶められている」〈オウィディウス『祭暦』1.218〉。（加えて）彼はそれを目に留めることもない。彼に対して、千の孤児、病院、癲病院、彼が過ごしている監獄の名において嘆願し、彼らが泣いて彼に援助を求めても、（加えて）あなたが耳の聞こえぬ者に話かけているように、彼は注意を払わず、彼らに石を食べさせ、彼らを蛆の餌食とさせ、彼ら自身の汚物の中で腐らせて、彼は注意を払わない。彼に朽ちた港、橋、学校、要塞など、あるいは何か公的な作品を示しなさい。（加

えて) 神のための、あなたの祖国のための、あなたの善き崇拜を、あなたの名誉を示しなさい(加えて)。しかし彼に、彼の名前が金文字で登録され、後の世々に推挙され、彼個人の標章のある紋章が記された、名誉ある者たちの名簿を見せるならば、おそらく、彼は立ち止まって、寄贈するだろう。あるいは、もしあなたが、教皇至上主義者たちが行なうように、彼に雷を落とし、満足しうる、称讃に値する仕事をさせることができるならば、あるいは、彼が自らの魂を地獄から救い出し煉獄から解放するように(彼が何か敬虔さをもっていればだが)、この手段によって説得できるならば、そのときはおそらく、彼は耳を傾け、踏み留まるだろう。あるいは、彼に子どもも、近しい親類も、少なくとも配慮すべき相続人がいない場合や、彼が自らの所用物をどのように、どこに託すのかを(それらを持って逝くわけにはいかないのだから)きちんと話しておくことができなければ、生存中にいくつかの学校や病院を建てるか、自分の死後には、寛大に敬虔な使途に委ねるよう彼を説得するが良からう。というのは、私はあえて大胆に述べるが、虚栄、その取柄のある見解、そして、この強い必然性が、彼らが他のやり方では、いかに自らの名を残すべきか、あるいはそのために何をするのが良いのかを知らない場合に、我々の善行の大部分にとって主たる原因となるからである。私がこのように主張するのは、人々の慈愛に満ちた献身やこの種の寛大さを損うためでも、善行を咎めるためでもない。疑いもなく、多くの聖なる、英雄的な、そして有徳の心をもつ人々がおり、彼らは真の熱意の下に、そして、同情と憐憫から自らの鷹揚さを発揮する、彼らの中に存している限りの徳(聖なる精神)のゆえに、万人に善行を施し、裸体の者に衣服を着せ、飢えた者に食物を与え、病んで窮乏した者を慰め、すべてを癒やし、侮辱を忘れて赦すのであり、これらは真の慈愛が求めていることである。しかし、その大部分は偽装されたものであり、この種の夥しい偽善であり、多くの欠陥と欠如である。フィレンツェの富裕な市民、コジモ・デ・メディチが、ある親しい友人に率直に告白したことによって、彼について知られることは、彼がきわめて多くの公的で壮麗な宮殿を建て、学者たちをきわめて気前よく援助したのは、彼が何にもまして学問を愛していたわけではなく、「彼自身の生を永遠化するため、学者たちからの恩恵によって不朽の者となるためだった。というのは、彼の友人たちが死に絶え、壁が崩れ、すべての銘記が消え去っても、書物は世界の終末まで存続するからである」[パオロ・ジョーヴィオ〈『著名者列伝』「コジモ・デ・メディチ」]。アテナイでは、灯台がクセノクレスによって、劇場がペリクレスによって、有名なピレウス港はムシクレス(正しくは、ムネシクレス)によって、パラスの丘のパラス像はペイディアスによって、パンテオン(パルテオン神殿)はカリクラティダスによって建造されたが[プルタルコス〈『対比列伝』「ペリクレス」]、しかし、これらの壮麗なモニュメントはすべて崩壊し、爾来長らく荒廃したままであり、それらの建築家たちの名前だけが、作家の媒介によって言祝がれている。そして、キケロがマリウスの椀について述べているように、それは今や切り倒されて枯れ、「農夫の手によって栽培されたいかなる樹木も、詩人の詩句によって育まれたものほどに永続しない」[『法律について』1(1.1)]。レベカの乳母のデボラが死に、根元に埋められたアロン・バクテ、すなわち「嘆きの椀」[『創世記』35.8]は、このような永続するモニュメントほどには記憶に留まらないだろう。虚栄心と敵

懐心が（ほとんどの人間にとっての）作用因であり、そして、自分自身の名声を吹き鳴らすことが、コジモの唯一の望みであり、彼は全世界に名声を知らしめるために、善行をすることに努めたのである。我々の時代の慈愛の大部分はこのようなものであり、我々の篤志家たち、マエケナス（文芸保護者）たち、庇護者たちはこのようなものである。私に、きわめて多くの富者の中で、真に敬虔な者、清廉な者、誠実な者、正直な者、従順な者、謙虚な者、無害の者、無垢な者、憐れみ深い者、情愛に深い者、慈愛に満ちた者を見せて欲しい。「我々の間で、誰が誠実に生きているだろうか」〔ホラティウス〈『諷刺詩』1.3.56-7〕〕。私にカレブとヨシユアを見せて欲しい。

ムーサよ、私にその男を語れ——

〈ホラティウス『詩論』141〉

有徳な婦人を、忠実な妻を、善き隣人を、信頼に足る従者を、従順な子どもを、真の友などを見せて欲しい。アフリカの鴉もそれらほど少なくはない。彼が吟味するのは、我々が住んでいる、この鉄の時代であり、そこでは、愛は凍りつき、「今や、地上からアストレアは去り」〈オウィディウス『変身物語』1.150〉、正義は従者たちとともに逃れ、徳は追放された。

正義の姉妹の

朽ちることのない信頼、裸体の真理。

〈ホラティウス『カルミナ』1.24.6-7〉

すべての女神が去り、ここでは悪徳がはびこり、悪魔が気ままに振る舞い、そして、ある男は自分の兄弟を、あたかも彼が無知で愚者であるかのように中傷し、侮辱し、彼を抑圧し、支配し、略奪し、彼を苛め、責め、傷つけ、彼を苦しめ、いたぶり、飢えさせるのを見るならば、どこに慈愛はあるのだろうか。彼が、人々が誓いを否認し、嘘をつき、偽りの証言をおこない、自分自身に利して、他人たちを謗り〔キケロ『ロスキウス・コモエドゥス弁護』〈16.49〉〕、財産、生命、幸運、信用、すべてのものを危険に晒し、敵たちから報復されるのを見るならば、また言語を絶するほど欲情に耽り、尋常でないほど悪意に満ちた人々を、このように血にまみれた目的を、イタリア人の誹謗中傷とスペイン人の責任放棄を見るならば、どこに慈愛はあるのだろうか。きわめて多くの法律訴訟、このような果てのなき論争、このような陰謀、策略、このような熱心さと猛烈さで費やされる、きわめて多くの金銭、自分自身の目的のためだけのあらゆる人々、万人にとっての悪魔、きわめて多くの苦悩に満ちた魂、このような嘆かわしい不平、きわめて多くの内紛、謀略、扇動、圧制、濫用、損傷、このような悪意、遺恨、不満、きわめて多くの敵愾心、嫉妬、きわめて多くの口論、争論、決闘などを観察することになる者が、慈愛はどうなるのか、と尋ねても当然だろう。我々が、このような残酷な闘争、騒乱、騒動、血まみれの戦闘、きわめて多くの殺害された人々〔ガリエヌス、トレベリウス・ポッリオ〈『生涯』18.1〕による〕、きわめて

多くの破壊された町々など（というのも、我々のすべての歴史の主題として、矛槍、弓、大砲以外のものはほとんど存在しないのだから）、きわめて多くの殺戮と虐殺について見て、読むときに、慈愛はどこにあるのだろうか。あるいは、全身全霊を神に捧げた人々、教会人たち、公然たる神学者たち、聖なる人々が、福音のトランペットを戦時のトランペットに変えるのを、地獄生まれのイエズス会士たち、そして激烈な精神をもつ修道士たちが、あらゆる扇動へと燈火を差し出すのを見るならば、それはあたかも、全世界に不和をもたらし（私は、彼らが生涯を費やしてお互いに、しかも「ビオンの諷刺詩と野蛮な機知による」〈ホラティウス『書簡詩』2. 2. 60）ほどの憎悪と辛辣さをもって書きながら、愚弄し罵倒しあう書物については口をつぐむが）、また、バレ〈『ローマ皇帝の事績』〉の述べるところでは、30年の間に39人の君公、148人の伯爵、235人の男爵、14755人の平民を焼き尽くした、かの十度にわたる迫害よりも酷い、血にまみれた異端審問をもたらした燃え木のようなものなのだから、慈愛はどこにあるのかと疑っても当然だろう。彼らが一体キリスト教徒なのかと、私はあなた方にお尋ねしたい。これらの事柄を観察し、見る者は、彼らに対して、カトがカエサルに言ったように、「あなたは天国も地獄も存在しないという意見の持ち主である、と私は確かに思う」と言うだろう。彼らに敬虔さと熱意がある振りをさせ、彼らが望んでいるものを示させ、施しをさせ、平安をもたらさせ、説教に通わせることにして、もし我々が果実によって樹木を推測しうるならば、彼らは偽善者、快樂主義者、無神論者に他ならず、「心の中では、神は存在しないと言っている愚者」〔『詩篇』13. 1〕とともにいる。それゆえ、もし我々が無慈悲で、頑なな心の者であり、きわめて頻繁に多くの不満、このような憂鬱の発作、きわめて苦い苦痛、相互の不和、喧騒にあるものすべて、度重なる苦悶、頻出する悲嘆、全般的な悲哀——もし地上に多くの悲劇があり、それらによって人類が揺り動かされ、惨めにも引き裂かれるならば——、きわめて多くの疫病、戦闘、喧騒、損失、洪水、火災、氾濫をもつならば、神の報復とエジプトのすべての飢饉が我々を襲わずとも、何も驚くことではない。というのは、我々は互いに野良犬のように諍い、神に敬意を払うことはまったくなく、隣人たちに対しても同様で、そして、自らの深い罪によってこれらの悲惨さを、我々自身の頭上に引き寄せるからである。否、それどころか、ヨセフスがかつて、彼の祖国の民であるユダヤ人たちについて述べたこと、すなわち、「もしローマ人たちが彼らの都市を略奪しようとやって来なかったとしても、この都市はいくつかの地震、洪水によって飲み込まれ、ソドムとゴモラのように天から火が送られるだろう——というのも、彼らの絶望的な悪意、不正、邪悪はこのようなものだったのだから」〔『ユダヤ戦争について』第6巻第16章〕ということが恐れられても当然だろう。もし我々がこれらの悲惨な道を歩み続けるならば、我々は同様に重大な災禍が我々に襲いかかるのを見ることになるだろうと想像すべきである。もし我々がこれらの事柄をいくらかでも感じとり悟るならば、我々は、たしかに、このような不規則な道程で、あらゆる不敬な仕方でも実践しているように、これからも続けるべきではなく、我々の態度全体が神にあまり背くことにはならないだろう。もし人間が、このような異常で無慈悲な行為のまさに只中において、それらがいかに神の目によって不快なことであるのか、それらがいかに自分自身を害しているのか、それを考え

さえするならば、ソロモンがヨアブに言ったように、「主はこの血を彼らの頭上に降り注ぐだろう」（『列王紀上』2. 23）。「突然の荒廃と破壊が、嵐のように彼らに降りかかるだろう」（『箴言』1. 27）。すなわち、苦悩、悲嘆、彼の手による応報が彼に与えられるだろう」（『イザヤ書』3. 11）。「彼らは、他人のために掘った穴の中に落ちるだろう」（『詩篇』7. 16）。そして、彼らがつかみ合い、虐げ、儲け、自らの富に溺れるとき、「おお、愚か者よ、今夜、私はおまえの命を取り去るだろう」（『ルカ福音書』12. 20）。彼らは何と重い償いをしなければならないことか、他方、憐れみ深い者は、神の目には何と祝福されていることか。彼は恵みを自らに注ぎこむ。「憐れみ深い者たちは祝福されている。というのは、彼らは憐れみを得るからである」（『マタイ福音書』5. 7）。「貧しい者に」貸す者は、神に「与えている」のであり、彼らに再び返されるだろう（『箴言』19. 17）。「彼らは、忍耐と長い苦痛によって、彼らの敵の頭上に炭火を積むであろう」（『ローマ人への手紙』12 〈20〉）。「そして、義と憐れみに従う者は、義と誉れを見出すだろう」（『箴言』21. 21）。すなわち、確かに彼らは、自らの欲望を抑え、自らの不自然で節度のない情感を制し、自らの間で合致し、悪をおこなうことを控え、自らの生を整え、善行をなすことを学ぶだろう。「見よ、兄弟たちが一緒に睦まじく生きていることは、すなわち貴い香油のごとく、何と麗しく善いことであろうか」（『詩篇』133. 1-2）。互いに争うのは何と醜いことであろうか。「なぜ我々は互いに争い、苦しめあっているのか、見よ、死は我々の頭上にある」（リプシウス〈『書簡集』〉2. 98）。そして、我々は間もなく、我々のすべての無慈悲な言葉と行為を釈明しなければならない。それについて考えをめぐらし、そして賢くありなさい。

第2章 第1節 第1項

憂鬱症を惹き起こす英雄的愛。

その起源、力、範囲。

前章〔第2節〕では、他の心優しい愛の対象に関し、女性から出るこの端正さと美について述べた。その端正さと美とは英雄的憂鬱症すなわち愛の憂鬱症を惹き起こすのだが、これこそが他の愛にも優り、まさに愛と呼ばれて然るべきものなのである。人においては、この愛に冒されるのは肝臓であり、それゆえに「英雄的」と呼ばれる。勇敢なる人たち、高貴なる人たち、そしてとても寛大な精神の持ち主が、共通してこれにとり憑かれるからである。その力や範囲はとても大きく、愛の二部分、友愛と愛、すなわち、プラトンその他の人たちが述べている二つの愛のなかで、英雄的愛はとても優っていて、先に述べたように、その最たるものはウェヌスと呼ばれ、愛そのものである。人によってかく称され、人において顕著なものであるが、植物的、感覺的の被造物にも、あの非物体的実体（とでもいえるもの）にも敷衍して現われ、それらに対し大いなる至上権を発揮する。パイドロスが〔プラトンの『饗宴』の中で〕議論しているごとく、その系統はとても古く、世界の原初から存在するが、その血統があまりに古いゆえ〔ボッカッチョ『神々の系譜』参照〕、見出した詩人はいなかった。ヘシオドスは、大地とカオスとを神々誕生以前の

愛の両親とする〈『神統記』(116ff.)〉。

すべての神々に先だって最初に愛が生まれた。

〈プルタルコス『愛をめぐる対話』〉

それをプロメテウスが天から取ってきた火と同じものとする人もいる。プルタルコスの『愛をめぐる対話』では、愛^{アモル}をイリスとゼフォロスの息子とするが、ソクラテスは、プラトンの心優しい対話篇のなかで、愛を主題に語る順番になったとき（あの韻文詩の語り手アガトンも、この主題について、新たに語る機会を得た）、韻文で次のような話を語る。ウェヌスが生まれたとき、すべての神々が宴に招かれたが、招かれなかった神々のなかに、豊穡と富の神ポロスがいた。貧困の女神ペニアが戸口に物乞いにやってきた。豊富にネクタルを（というのも当時、葡萄酒はなかったから）所有していたポロスは、ユピテルの園を歩いていたとき四阿でペニアに出会った。彼は自分が持っていたネクタルの酔いにまかせて彼女に身籠もらせ、そこで生まれたのがアモルである。愛^{アモル}はウェヌスが誕生した日に生まれたので、ウェヌスはつねに愛と共にいるのである。これについての教訓をフィチーノに読むことができる〔『プラトン「饗宴」註解』第7章〕。またアリストパネスから借用した別の話がある。すなわち、世界の初め、人は四本の腕と四本の足を持っていたが、神々と張り合った傲慢さゆえに、半分に分けられてしまった。そして今では、巧くいけば、愛によって結び合わされ一つになることを願う〔ウァレシウス、第3巻第13書も参照のこと〕。それでなければ、次の話もある。ウルカヌスが二人の恋人たちに出逢い、彼らの欲しいものを願えと命じたが、それは彼らが持つべきものであった。だが、彼らは答えた、「『おお、ウルカヌス、神々の鍛冶屋よ、どうか汝の炉で我らを鑄なおし、二人を一人にしてください』と。その願いをウルカヌスはすぐさま聞き届け、それ以来二人の恋する者たちは二人で一人に、そうでなければ、結ばれたいと願うのである」〔ビベス『靈魂論』〕。レオーネ・エブレオの『愛の対話』第3対話には、多くの同様の話と、恋人たちに対する教訓が見出される〔ナターレ・コンティ『神話学』〕。愛がいつも若者として描かれる理由は、（コルヌトゥスなどなら言うであろうが）「若者が最も愛に落ちやすいからである。愛が美しく、柔らかく、ふくよかに描かれるのは、そのような者が最も愛に陥りやすいからである。裸で描かれるのは、すべての情愛は率直であからさまだからである。微笑んで描かれるのは、心愉しく歓びに身を委ねているからである。籠を持っているのは、誰もそこから逃れられない愛の力を描くためである。盲目なのは、愛には自分の矢が何処に当たり、誰を射抜くのか解らないからである、等々」〈リーリオ・グレゴリオ・ジラルディ〉。愛の力や至高権について詩人たちは書き、そこでは、愛は神——ユピテルにも優る、さからえぬ神、プラトンによれば大なるダイモン、アルキノスやアテナイオス〔『食卓の賢人たち』第13巻第5章〕によれば最も強く最も愉快な神——と捉えられる。エウリピデスは「愛は人を統べる王、神々の王」と言う。我々はその愛に敬意を表し、その神性を聖祝日に忠実に讃え、その神殿で彼を祀り、その像を崇拜し、（それが神性で、ただの名前ではないゆえに）かつその祭壇に供

物を捧げねばならないのであるから。

愛と戦うぐらいなら、
獅子、牡鹿、アエトリアの猪と戦う方が、
アンタエウスやステュンパルスの鳥と戦う方がました。

[プラウトゥス〈『ベルシア人』〉]

愛はあまりに強力で、何のものにも彼に貢ぐことを強い、すべてを支配し [オウィディウス〈『名婦の書簡』〉]、思うがままに狂気にも正気にもすることができる。キケロの『トゥスクルム荘対談集』〈4. 32. 68〉でのカエキリウスは、愛が偉大なる神であることが解らず、馬鹿か白痴同然と考えるのである。

正気を失わせるも知力をつけさせるも、癒すも
病に陥らせるも、それは愛の手の内にあるのであろう。

[セルダン『シリアの神々について』]

愛はまた支配する者を病にもさせ、治癒させることもできる。愛の神性を否定するレオーネ・エブレオの言葉を信ずるなら、ホメロスとステシコロスはどちらも盲目にされた〈『愛の対話』[第3対話]〉。アリストパネスは愛^{アモル}を貶め、神々の会議で侮辱的に排除され、そのうえ両の翼を切られ、それゆえ、もはや神々の仲間には入れず、父親に恥をかかせて永遠に天から追放され、地上に閉じこめられて住まうこととなったと言うが、それでも愛はあれほどの力、権威、全能、支配力を有するゆえ、何者も彼には抗することができない。

クピドはさらに思いのままに神々に対して命ずるが、
勇壮なユピテルすらこのクピドを止めることはできない。

[ソポクレス〈『トラキアの女たち』、『パイドラ』〉]

愛は神々と四分の一ずつ以上の支配権をもっている。

——海をテーティスと、影をアエクスと、空をユピテルと
分け合って所有する。

〈セネカ『トロイアの女たち』〉

しかも所有するのと同時に支配する。ユピテルは愛のためなら、サトゥルヌス、羊飼、牡牛、白鳥、黄金の雨であれ何であれ変身する、ルキアノス [〈『神々の対話』〉第4巻] のユノが、いみじく

も「お前はクビドの独楽」、いかに彼が、マルス、ネプトゥヌス、ファウヌス、メルクリウス、バックス、その他の神々を愚弄してきたかと、ユピテルに不服を申し立てたか。ルキアノス〈『同』〉は、自分はもう黙ってられないとクビドに不満をもらすユピテルを作品に描いた。エンディミオンを酔わせる力もないと嘆くルナ〔ルキアノス、『同』第3巻〕や、同様に、息子クビドが無礼にも、自分が母親であることを利用していると嘆くウェヌスをも描いている。「クビドがあるときは、かのトロイアのアンキセスへの愛ゆえにウェヌスをイダの山の上に連れて行き、またあるときは、かのアッシリアの若者のゆえにレバヌスの山にも連れて行った。彼女がクビドの弓矢を折るとか翼を切るとか脅かし、そのうえ裸のお尻をスリッパで叩くと威しても、何の効き目もなく、クビドは強情で言うことをきかなかった」。ヘラクレスをもやっつける怪物もクビドには手懐けられたのである。

千もの野獣も、ステネルスの敵どもも、
ユノも打ち勝てないものをも、愛は打ち負かす。

〈オウィディウス『名婦の書簡』9.25-26〉

あなた方の知る限りの勇敢な兵士たちも、心豊かな人物も愛で弱体化される、「女性の魅力に対して身を委ねてしまい、抱擁で穢される」〈モリソ『アトリピルスの真実の涙』f.77〉。あらゆる病の治癒についてクビドと論争したアポロンは、これに勝てなかった〈オウィディウス『変身物語』1.523〉、それゆえ、ソクラテスはクビドを僭主と呼び、戦車に載せて凱旋させる〔プルタルコス『愛をめぐる対話』〈18〉〕。ペトラルカは愛の凱旋の詩〈『凱旋』〉においてこれを模倣し、フラカストロは優美な詩〈『魂について』〉で、クビドが戦車に乗り、マルスやアポロンが後に従い、プシュケーが泣いていると、詳しく描いている。

植物的被造物において、いかなる至高性を愛が有しているかは、多くの豊かな証拠とよく知られた例によって証明することができるだろう。とりわけ棕櫚は、雌雄の両性を持ち、共感だけではなく、また愛の情念も表すのであり、そのことは多くの観察によって確認されてきた。

枝葉は愛に向かって生き、他方、あらゆる
幸運な樹木は愛し、棕櫚は互いに誓いを
交わし、ポプラは感極まってポプラに嘆息をつき、
そしてプラタナスはプラタナスに、ハンノキはハンノキに囁く。

〔クラウディアヌス〈『ホノリウス帝祝婚歌』65-68〉「ウェヌスの神殿の描写」〕

コンスタンティノスは『農業論』第10巻第4章において、フロレンティウスの『農耕詩』から、いとも熱烈に愛した、ある棕櫚の木の例を引いている。この棕櫚の木は、「愛する木が自らに振り向かなければ、満足することがなかった。あなたは、2本の木がたわみ、それら自身で合致し

て、それぞれの枝を伸ばし、互いに抱擁し、接吻するのを見るかもしれない。それらは相互的愛の明白な徴を与えるだろう」〈カッシアヌス・バッシス『コンスタンティノス農業論』〉。アンミアヌス・マルケリヌスは『ローマ史』第24巻〈3.12-13〉において、それらは互いに結びつき、目に入るや恋に落ち、風がそれらに香りをもたらし、驚くほど心を動かされる、と報告している。ピロストラトスは『絵画記』〈1.6〉において、そしてガレノスは『患部について』第6巻第5章において同様なことを観察している。すなわち、それらの木は、愛のゆえに病気に罹り、死ぬほどにやつれてしまい、そのことに農夫たちが気づくと——コンスタンティノスが述べているように——「彼らは一緒に成長する多くの棕櫚を撫で、そして、恋に陥った棕櫚を何度も撫でることによって、互いを接吻させる」〈カッシアヌス・バッシス『同』〉。あるいは、彼らは、一方の葉と枝を他方の幹に結びつけ、それらをともに開花させ、はるかに良く繁榮させるだろう。「それらが愛し合っていることを、彼らは、枝の曲がりから、また幹の傾きから気づくことができる」〈カッシアヌス・バッシス『同』〉。もし、私が述べていることが作り話と考える人がいるならば、イタリアの2本の棕櫚の木の物語を読ませることにしよう。すなわち、ブルンディシウムで育った雄の棕櫚と、オトラントで育った雌の棕櫚は（ナポリ王アルフォンス（子）の家庭教師であり、国家の秘書官であり、偉大な哲学者であったジョヴァンニ・ポンターノがある卓越した詩篇〈『エリダヌス』1「棕櫚について」〉において語っているように）、長い距離によって隔てられていながら、高く成長することによって互いを見ることになるまでは、「不毛であり、長い間、そのままの状態が続いた」。ピエリオ・ヴァレリアーノは『ヒエログリフ集』〈50「婚姻」〉において、またメルキオル・ヴィーラントは『パピルスについての論考』第3項において、このポンターノの物語を真実なものとして引用している。さらには、グイド・パンチローリの『新発見』第1章「新世界について」へのサルムトの注釈を、アントワーヌ・ミゾーの『自然の記憶されるべき秘密の森』第2巻を、ジョージ・サンズの『旅行記』第2巻103葉、などを見よ。

もしこのような熱狂が自生的被造物の中にあるならば、我々は可感的被造物については何を考えるべきであろうか。それらの中では、熱狂は前者の中よりもはるかに強烈で明瞭ではないだろうか。

さて地上のすべての種族は、人間も野獣も、
また、海の種族も、家畜も、色鮮やかな鳥たちも、
猛り狂う炎の中へと進みゆく。すべてにとって、愛は同じである。

[ウエルギリウス『農耕詩』3〈242-44〉]

この神は大地と深い海を馴致する。

[プロペルティウス『詩集』2.26.52]

共通の経験と我々の感覚は我々に、騒々しい野獣がいかに激しく、この情念によって捕らわれる

のかを告げるだろう。とりわけ、馬たちがそうである。

雌馬たちの狂乱は著しい。

〈ウェルギリウス『農耕詩』3.266〉

ルキアヌス [『神々の対話』(20.2)] の中で「クピドは、母親のウェヌスに褒めてもらおうと嘆願している。というのは、彼は今やライオンたちと仲良くなり、しばしばその背中に乗り、そのたてがみをつかみ、馬のようにそれらに乗っており、そして、ライオンたちも尾を彼にじゃれつかせているからである」。雄牛、雄熊、雄豚はこの種のことではきわめて激烈であり、互いに殺し合うほどである。とりわけ雄鶏、雄ライオン [プリニウス〈博物誌〉第8巻第16章、アリストテレス『動物誌』第6巻]、雄鹿はきわめて獐猛であり、半マイル先からそれらの争いの声は聞くことができるだろう、とトゥルバーヴィル [『狩猟の書』第17章] は語っている。そして、それらの野獣は多くの場合、互いに殺しあい、あるいは発情を放棄するように強いて、その結果、自らの縄張りに主人として留まるのである。「そして、ある野獣が敵対者を放逐すると、それは自らの鼻を空中に上げて、そして、あたかも自然に感謝を捧げるかのように上方を見つめる」〈ジョージ・ギャスコイン『高貴な狩猟術』〉。自然がそれにこのような大きな喜びを与えたからである。いかに鳥たちがこの種のことで心を動かされるかについては、アリストテレス (『動物誌』4.9) から明らかである。彼は、鳥たちが歓喜のために、来たるべき情交への希望の中で歌うと述べている。

第一に、空飛ぶ鳥たちがあなたのことを、女神よ、あなたの
到来を告げ知らせる、あなたの力によって心を震わせながら。

〔ルクレティウス〈『事物の本性について』1.12-13〕

もしベルナルディノ・ゴメス・ミエデスの権威に訴えるならば、「魚は愛のゆえにやつれ、痩せほそる」 [『機知について』第1巻第21章]。そして、魚のあるものはまたいきり立つ。ピエール・ジルは『動物誌』第10巻において、エピルスのトリトンの驚異について述べている。海岸から遠くないところに井戸があり、そこで土地の女たちが水を汲んでいた。トリトンたちが、情欲に駆られて、女たちを自らの上に載せ、海へ連れ去り、身を委ねなければ溺れさせようとした。それほどに、愛は黙する被造物において専制君主のように支配する。ある野獣が、同じ種類の別の野獣を熱愛するのは自然なことであるが、ある野獣がある人間を熱愛するとは、なんと奇妙な狂乱であろうか。サクソ・グラマティクスは『デンマーク人の事績』第10巻において、ある女性を愛して、彼女を自分の巣穴に長い間、閉じこめていた熊について物語っている。この熊によって彼女は息子を産み、彼女から多くの北欧の王が出来たのである。これはおそらく、ヴァレンティヌスとオルソンの周知の物語と由来を同じくする。アエリアノス、プリニウス、ピエール・

ジルは、このような物語に満ちている。レウカディアの孔雀は、ある乙女を愛し、彼女が死ぬと、その孔雀は痩せ衰えた。「ある海豚はヘルニアスという名の少年を愛した。そして、彼が死ぬと、この魚は丘に上がり、そして死に至った」〔プリニウス〈『博物誌』〉第10巻第5章〕。ピエール・ジルは、〈『博物誌』〉第10巻第22章において、アピオンの『エジプト史』第15巻に拠って、同様なことを付け加えている。すなわち、プテオリのある海豚がある子どもを愛し、しばしば彼のところにやってきて、彼を背中に乗せて連れ回した。「そして、子どもが病気で亡くなると、その海豚も死んだ」。あらゆる書物はこのような物語に満ちており、(太守の宮廷の皇帝大使であるオージェ = ギスラン・ド・ブスベックが、少し前に、『トルコ大使の書簡』第3巻で述べているように)「このような事例を提供してはいるが、私は常に、それを信じまいとしていたし、少なくとも、私が物語に確証を与えていると思われないようにしていたが、しかし、自分がアッシリアから連れてきたある大山猫が、私の部下の一人に大きな愛情を抱き、彼に恋していることを否定できないのを見てとった。私の部下が居るとき、その野獣は多くの目立った誘いと愛想のよい動きを示そうとした。そして、彼が去ろうとすると彼を引き留め、彼が去ると彼のあとを見送り、彼が居ないときはとても悲しそうで、しかし、彼が戻ると喜びに満ちた。そして、彼が私の許を去ると、その野獣はすっかり病気に罹って、彼への愛を表し、そして数日の間、嘆き悲しんで死んだ」。ブスベックは、マジョルカのある鶴について、同様な別の話を語っている。この鶴は、あるスペイン人を愛し、どこでも彼とともに歩き、彼が不在のときは彼を捜し求め、自分のことが聞こえるように叫び、彼の戸をたたき、「そして、彼が最後のお別れをすると、餓死した」。

愛はそのような愉しい戯れを、鳥や魚、動物とも楽しむことができる。

ウェヌスは空、エーテル、海、大地の鍵を手にする。

そして彼女ただ一人これらすべてに対する支配権をもつ。

〔オルペウス「ウェヌス讃歌〈55〉」〈5-7, 13-15〉〕

もし、他の生けとし生けるものと同じように、愛に落ち、愛に溺れる（と言って良いなら）、天の霊や地獄の悪魔について、然るべき人の言っていることが確かなら話だが。というのも、インクブス、スクブスの夢魔や、ニンフ、淫靡なファウヌスやサテュロス、魔神たる異教の神々、隠奔なテルキネス、その他プラトン主義者たちが幾多の物語のなかで語るものたちについて書かれた話が真実ならば、あるいは、昨今よくある魔女や悪魔との親しい接触や交わりについても、愛が広範なものである何らかの可能性が示される。悪魔が女との肉体的交わりをもつなどということ、ピエルマン〈『魔術的作用について』〉やウエイエル（〈『悪魔の欺瞞』〉第3巻、第19、24章）等は強く拒否し、悪魔はそのようなことに快樂を得たりはしない、インクブスやスクブスとの関係など、すべて夢想で虚偽、お話にすぎないと言う。しかし、アウグスティヌス（『神の国』第15巻）は認め、エラストゥス（『ラミアについて』）、ヤコブ・シュブレンガー（『魔女への鉄槌』第2部、第1問、第4章）とその一派、ザンキウス（『神の六日間の創造について』

第4巻、第16章)、ダンディーニ(『アリストテレス「靈魂論」註解』第2巻、第29テキスト、第30註解)、ボダン(『魔術師たちの悪魔的狂気について』第2巻第7章)、本題に関しては他の残りの人たちの追隨を許さぬ戦士パラケルスス、彼らは多くの証明、証拠、証言で、さまざまな個別事例を示して、愛が天の者にも悪魔にも共通であることを証明している。ヘクタ・ボイスはスコットランド史において、三、四の事例を挙げ、それをカルダーノが〈『事物の多様性について』〉第16巻、第43章で、何年にもわたって同様の様相を示してきたもの、しかも人の習いとでもいえるものについて、追認している。ピロストラトスは『アポロニオス伝』第4巻で、メニッポス・リキオスとかいう25歳の若者の忘れられない(ゆえに割愛するわけにはいかない)例について述べている。彼はケクレエスからコリントの間を歩いていて、美しい女性の装いの幻影に出逢った。彼女は若者の手を取り、コリント郊外の自分の家に連れて帰り、自分がフェニキアの生まれだと告げ、もし彼女の許に留まってくれるなら、「彼女の歌や演奏を聴かせ、誰も飲んだことのない葡萄酒を味わわせ、誰にも邪魔立てさせない。彼女はずっと麗しく美しく、見目麗しく美しいままで、そんな彼と共に生きて死のう」と言った。その若者は哲学者、とまで言わずとも思慮深く沈着、感情を抑えることができたのだが、愛に関してはそうはいかず、彼女の許に留まり大いに満足であった。ついに彼女と結婚し、その結婚式には他の客に混じってアポロニオスがいた。アポロニオスは、何らかの予兆を読み取り、彼女が蛇姫ラミアで、その実質は、ホメロスによって描かれたタンタルスの黄金のように、実体はなく幻想だと見破った。彼女は自分の正体を知られたと知って泣き、アポロニオスが口外せぬよう願ったが、彼は心を動かすことはなく、彼女は、宴卓や家、そこにあるもの諸共、たちまち消え失せた。「このことはギリシアの真ん中で起こったがゆえに、何千という人々が気づいた」(『アポロニオス伝』第4巻)。オウィディウス『変身物語』第10巻でのオルベウスの物語への注釈で、サビヌスは、バイエルンのある男について述べている。この男は、愛する妻の死を何か月もの間嘆き続けたところ、ついに悪魔が妻の身なりで現われ、彼を慰めて言った、あまりに妻に執着しているゆえに、もう一度彼と暮らすためにやってきたと。ただし条件があり、その条件は、これを初婚とし、以前口にした誓いや罵りの言葉を決して使わないというものであり、もし、その条件を破れば、妻はたちまち消え去るというものであった。「彼はそれを誓約し、結婚し、彼女と暮らした。彼女は彼に子どもをなし、彼の家を守ったが、いつも顔色が悪く悲しげだった。こうして彼らの暮らしは続いたが、ついにある日、二人は夫婦喧嘩をし、彼は誓をたてた。たちまち妻は消え、その後二度と姿を見せることはなかった」(『オウィディウス「変身物語」評釈』)。「このことを、信用できる人たちから聞いた。バイエルン公が、確かなこととして、サクソン公に伝えたと、その者たちは言った」とサビヌスは述べている。もう一つの例を、我が国の正直な歴史家〈マシュ・パリシ〉の『歴史精華』「1058年まで」から挙げよう。その話は当時ヨーロッパ中で話題になったものとして、自信をもって書いているからである。ローマのある高貴な若い男が、結婚したその日、花嫁や友人と食卓を囲んだのち、野に散歩に出かけた。夕暮れ近くなって、一汗流そうとテニス・コートに來た。テニスをしている間、彼は結婚指輪を、真鍮でできたウェヌス像の指につけた。彼がテニスを充分に楽しんで終

え、指輪を取りに戻ると、ウェヌスは指を曲げていて、どうしても指輪を抜くことができなかった。それゆえ、そのときは仲間を待たせたくなかったのだから、翌日かいつか都合のいい時に取りに来ようと、指輪をそこに残して夕食に帰り、そのまま床に就いた。その夜、新床の儀式を執り行なうべきときに、ウェヌスが彼と（姿が見えず、触れることもできなくなっていた）花嫁との間に割り込み、彼がウェヌスの指につけたその指輪を授けて彼女と婚約したのだから、自分が妻だと言った。ウェヌスはその後幾夜も彼を悩ませた。どうしていいかわからず、パルンブスとかいう、時の博識の魔術師に嘆きを訴えた。パルンブスは彼に手紙を渡し、夜そのようなことが起こった時に、町のはずれの十字路で、老サトゥルヌスが、いつものように仲間と行列をなして通りかかるであろうから、その手紙を彼に直接、自ら手渡しするようにと申し渡した。その若い男は大膽な気性だったので、言われた通りにした。老サトゥルヌスはその手紙を読むと、自分より先に行進していたウェヌスと呼び、指輪を外すように命じた。彼女はすぐに言われたようにし、男は苦悩から解放されたのであった。あまたの同じような話が、今述べたようなことを証明して見せているのを、[ヘロドトス『歴史』第6巻「エラト」でのダマラトウスやアリストヌスの話など]あれこれの作家に私は見出す。その他の事例でさらに注目すべきものとしては、プレゴンの『ギリシアの驚異の作家たち』第1章「驚異の事象」におけるピリニウムとマカテスの話[メウルシウスの評釈に拠る]を、また反論する人は多いであろうが、私としては、ラクタンティウス『神学綱要』2.15)第14巻第15章の次の話を挙げたい。「神が天使を人間の監督に遣わした。だが彼らが我らに混じって暮らすうち、情欲に燃え、地上の悪戯な頭たる人間は、次第次第に天使を悪徳へと誘い女性と交わらせて穢した」。またアナクサゴラス[の『弁明』24.5-6]「死者の復活について」も挙げておこう。曰く「多くの霊的身体は女性への愛に打ち負かされ、情欲に敗け、彼らからいわゆる巨人族が生まれた」。殉教者ユスティノス、アレクサンドリアのクレメンス、スルキピウス・セウエルス、エウセビオスなどは、この意味で、天使の二重の墮落について書いている。一つは世界の原初からの墮落であり、もう一つは大洪水の少し前の墮落である。後者は、モーセが説いているとおり、^{デウス}悪霊が生まれ、女性と肉体的な交わりをもったとあからさまに語られている[〈ペレイラ〉『創世記注釈と評論』第8巻（『創世記』第6章第2節について）、ザンキ等]。東インドの日本では、(旅した者の話[パーチェス『ハクルイトウス・ポストフムス』第1部第4巻第1章第7節]を信ずるなら)今でも「天主堂」と呼ばれる偶像神がいて、その許に毎月、国一番の美しい娘が連れてこられ、教会とでもいう「仏」の一室に独り置かれ、座して待ち処女を奪われるという。ときには「天主堂」は(多分悪魔だが)彼女の眼にも見えて現われ、肉体的に彼女を知ることもある。毎月、美しい処女が連れ込まれるが、その後どう年老いていくのかは誰も知らない。バビロニアのユピテル・ベルスの美しい神殿には、美しい礼拝堂があったと、ヘロドトスが[『歴史』第1巻「クレイオ」で]書いているが、彼自身その眼で見たのである。カルデアの神官がヘロドトスに語ったことには、そこには豪華なカヴァーの掛かったベッド、金のテーブルなどがあり、神が選んだ特定の一人の女性以外誰も入ることができず、神自身が彼女と床を共にした。同じことが昔エジプトでも行なわれていた。ゆえにこのことは別に目新しいこ

とではなく、悪魔本人や悪魔に操られた神官たちが、どの時代にも、そのような邪行を重ねていたのである。頑なにこれを否む聖職者も多くいるが、私はリプシウスと同意見で、「こういった不幸な女性の例、証拠や告白は、他所でもよくあることで、このわが町ルーヴェンでもとても多くの例があってもおかしくない」[『ストア派自然学』第1巻第20章]と結論する。「ただ一つ、次のことを付け加えたい。過去のどの時代にも、我らが時代ほど、日々話題や、裁判での判決記録に見られるように、多くのサテュロスとか^{ゲニウス}悪霊とかいった淫奔な悪魔が現われたことがないのは、この不幸な時代の如何なる運命によるのかわからない」(『ストア派自然学』)。この問題に関しては、さらにプルタルコス『対比列伝』「ヌマ・ポンピリウス伝、アウグスティヌス『神の国』第15巻、ウェイエル『悪魔の欺瞞』第3巻、ジェラルド・ドゥ・バリ『ウェールズ旅行記』第1巻、〈シュブレンガー〉『魔女への鉄槌』第5部第5問、ヤコブ・ルフ〈『人の妊娠と出産について』〉第5巻第4章第54葉、ゲオルク〈『魔術、妖術、ラミアについての議論』〉第2巻第4章、エラストゥス〈『ラミアについて』〉、デ・バレス『宗教哲学』第40章〈正しくは第8章〉、ヨハン・ニーダー『フォルミカリウス』第5巻第9章、ストロツィ・チコーニャ〈『魔術大鑑』〉第3巻第3章、デルリオ〈『魔術探求』〉、リプシウス、ボダン『魔術論』第2巻第7章、ペレイラ『創世記注釈と評論』第8巻(『創世記』6.2について)、ジェイムズ1世〈『悪魔学』〉などを読んできたい。

第2項

いかにして愛は人間を支配するのか。愛、あるいは英雄的憂鬱。
その定義、冒される場所。

あなた方は、いかにしてこの暴君のごとき愛が野蛮な獣と精神とともに暴れ回っているのかを聞いたのだから、今や我々は、愛が人間たちの間にいかなる情念を惹き起こすのかについて考察することにしよう。

邪悪なアモルよ、おまえは死すべき者たちの心を強くないというのか。

[ウェルギリウス〈『アエネイス』4.412〉]

いかにしてそれは、死すべき者たちの心をくすぐるのか、

私は身震いしながら語る――。

〈ウェルギリウス『アエネイス』2.204〉

私は語るのが恐ろしとでも言おうか、当惑し、恥ずかしい[というのは、秘密に行なわれる事柄については語るのは恥ずべきことだから。『エフェソスの信徒への手紙』5.12]。それはこのよ

うな法外で途方もない結果を、このように卑劣な罪をもたらした。愛は実際、（私には否定できないのだが）最初に、諸州を結びつけ、都市を建設し、永続的な世代によって人類を創り、保持し、キリスト教を繁栄させる。しかし、もし愛が荒れ狂うならば、それはもはや愛ではなく、燃え上がる欲望、疾患、狂乱、狂気、地獄である。「それはオルクス、不治の力、狂気の怒りである」[プルタルコス『愛についての対話』〈13〉]。それは有徳の習慣などではなく、精神の激しい動揺であり、本性、知性、術策の怪物であり、アレクシスがアテナイオス〔〈『パイドロス』〉第13章〕で述べているように、「男らしい勇敢、女々しい臆病、狂気による無謀、労苦による懦弱、苦い蜂蜜、魅惑的な打擲など」である。それは王国を覆し、都市、町、家族を破壊し、損ない、汚し、そして人間を虐殺する。雷鳴、稲妻、戦争、火災、飢饉も、この燃え上がる欲望、この獣的な情念ほどに、人類に災厄をもたらさなかった。ソドムとゴモラ、トロイア（ピュリギア人ダレスとクレタ人ディクティスが立証するだろう）を挙げよう。私は、記録を残している都市がいくつかあるかは知らないほどである。——「そして、ヘレネの前にもあった」。そして、続くすべての世紀が名前を銘記している。すなわち、イタリアはナポリのジョヴァンナ、フランスのフレデゴンドとブルンハルトであり、すべての歴史がこれらのパシリスクたちで満ちている。彼らの欲望を満たすために日々起こる決闘、殺人、流血、強姦、暴動、蕩尽に加えて、貧窮、恥辱、損失、苦悶、厳罰、不面目、それらから生じる、熱射病や有害な伝染病より悪質な忌まわしい疾患があり、そして、しばしば罹る痛風、痘瘡、関節炎、麻痺、痙攣、坐骨痛、発作、激痛、炎症などは身体を苛んで、あの致命的な憂鬱症をもたらし、それは魂を現世においては責め苦しめ、来世においては永遠に苛む。

彼らはこれらの悲惨さと多くの同様な悲惨さ、脅迫、苦悶が、他方では、報酬、勧告が確実に彼らにもたらされることを知っていながら、しかし、彼ら自身の虚弱さ、貧相な本性、あるいは、激しく荒れ狂っている愛の支配のゆえに、彼らは、屠殺場へと引かれていく雄牛のように〔『箴言』7.22〕苦しんでいる。「冥府に降るのは容易」〈ウエルギリウス『アエネイス』6.126〕であり、彼らは真逆さまに、彼ら自身の破滅と落ちて行き、野獣たちと狂気とともにし、パウロが述べているように〔『ローマの信徒への手紙』1.27〕、男は「女との自然の関係を捨てて、互いにその情欲の炎を燃やし、男は男と恥すべきことを行なう」。

セミラミスは雄馬と、パシパエは雄牛と、エベソスのアリストニュモスは雄驢馬と交わり（偽プルタルコス『小対比列伝』29）、フルウィウスは雌馬と、他の者たちは犬、山羊などと交わり、そこからときおり怪物が、ケンタウルス、シルヴァヌス、そして人間を恐怖させる奇怪な姿のものが生まれた。野獣だけではなく、男同士でも交わり、それはソドムの罪と一般に言われている。そして、それはかつて東洋の人において頻繁に起こったが、もちろんギリシア人、イタリア人、アフリカ人、アジア人においても同様であった。ヘラクレスはヒュラム、ポリュクレトゥム、ディオオン、ペリトンタ、アブデルス、プリュガを所有し、ある者たちは、エウリュステウスはヘラクレスによって愛されていたと述べている〔ジラルドゥス「ヘラクレスの生涯」〕。ソクラテスは、美しい青年たちのゆえに体育館を頻繁に訪れ、恥すべき光景を眼で味わっていた〔ルキアノス『愛

の対話』〈51〉]。そのことは、『ピレボス』、『パイドン』、『敵対者たち』、『カルミデス』、そして、プラトンの残りの対話篇が十分に、またそれ以上に証明している。そのことは、たしかにアルキビアデスが、ソクラテス自身について、「私は喜んで沈黙しますが、しかしひるんでいます。彼は欲情に多くの刺激を与えるのですから」と語っている。そして、彼のことをテオドレトゥスは『ギリシア人の情念の治癒』の最終章において非難している。しかし、プラトン自身は彼のアガトンを称讃し、クセノポンはクリニアス、ウィルギリウス・アレクシス、アナクレオン・パテュロス¹を讃美している。一方、ネロ、クラウディウス、その他の者たちの奇怪な欲情について後世に伝えられていることについては、ペトロニウス、スエトニウス、そして他の者たちを、あなた方に探してもらいたい。というのは、それは、あなた方が私に期待している以上の、あらゆる信を超えることだからであり、我々は過去の事柄を嘆くだろう〈セネカ『狂えるヘラクレス』19〉。アジア人、トルコ人、イタリア人の間においても、この悪徳が、今日以上に頻繁に見られたことはなかった。男色がローマ人たちのディアナだった〔ブスベック〈『トルコ大使の書簡』〉〕。トルコ人の中では、仕事場のどこかで、ある人々が

種^{たね}を石に注ぎ

〈偽ルキアノス『愛の対話』20〉

砂を耕している。そして、結婚した者たちの間では、このことについて、頻繁に不満が生じた。「その者たちは、男たちの許されない交接を、靴の反対の部分に向けてことによって、政務官に訴えた」〈ブスベック『トルコ大使の書簡』〉。イタリア人の中では、これ以上に見慣れた罪はない。ルキアヌス〔・カリデモ〕とタティウス〔『レウキッペとクレイトンの物語』〕第2巻〈38〉〕によれば、彼らは膨大な書物を著してそれを擁護している。ベネヴェントの司教ジョヴァンニ・デッラ・カーザは、それを神聖な業、甘美な罪と呼び、別の交合を行なわないことを自慢している。修道士、枢機卿、司教の間では、それはより一般的なことで、この激情は死へ、狂気へと至るほどである〔マルティアリス〈『エピグラム集』3.76.3〉〕。アンジェロ・ポリツィアーノは、少年への愛から、暴力をふるう両手を自分自身の上に置いた〔ジョーヴィオ「モスコヴィア」〕。そして、まったく、語るのも恐ろしいことだが、我々の国において、記憶の限りでは、いかに多くの忌まわしい罪が巻き起こったことか。というのも、実際、1538年に、「最も思慮深い国王ヘンリ8世は、修道士たちの修道院、司祭たちと誓願者たちの寮舎を、崇敬すべき法学博士、トマス・リーとリチャード・レイトンによって巡察させた。そして、彼らの間にはきわめて多くの女郎買い、稚児、放蕩者、獣姦者、少年愛好者、青年愛好者、男色家が、(バレの言葉を用いるならば)『ローマ教皇庁の記録』「読者への助言」〕ガニユメデスが見いだされ、彼らの各々の中に、新たなゴモラが存在することが信じられるほどである。しかし、もし、彼らの目録が気に入ったならば、同じバレにおいて次のことに注視されたい。「少女たちは(と、彼は述べている)死体愛好家の修道士たちのゆえに、ベッドの中で眠ることでできない」。これらのことが、誓願者、修道士、すなわち聖な

る司祭の間で起こるならば、市場の中で何が、宮殿の中で何がなされているかを怪しむべきだろう。貴族たちの間では何が、売春宿の中では何が起こり、それは不快ではないものだろうか、不浄ではないものだろうか。ともかく私は、それらの汚濁に満ちたものについては沈黙しよう、また、修道士の自慰と名づけられているもの〔メルクリアーリ〈『実践的医学』3.38〕「持続勃起症について」、カエリウス〈・ロディギヌス〉『古代の講読』第141巻第14章、ガレノス『診断法』6〕——ロデリクス・ア・カストロは手淫と呼んでいる〔『女性の医学一般について』第1巻第15章〕——についても、そして、情欲を刺激するために互いに鞭で打ち合う者たちについても、男娼、娼婦、遊女、淫らな腰つきで互いの身体を擦り合う女の同性愛者についても、さらには、情欲を満たすために人工陰茎を用いる去勢者についても沈黙しよう。それよりも、さらに驚くべきなのは、コンスタンティノーブルの女のことで、彼女は少し以前に、ある女に恋い焦がれたあげく、まったく信じがたいことを企て、姿を変えて男を装い、婚礼の儀式に向かい、結局、結婚したのである。しかし、このことは著者のプスベック自身を参照されたい。私は、美しい姿の屍体と添い寝していた、エジプトの防腐保護処置者たち〔ヘロドトス〈『歴史』〉第2巻〈89〉「エウテルペ」〕と、偶像と画像に恋い焦がれた者たちの狂気じみた欲情については省くことにする。オウィディウス〔『変身物語』10〈243-97〉〕におけるピグマリオンの寓話は有名であり、ヘゲシッポスの『ユダヤの戦争について』第2巻第4章におけるムンドゥスとパウリヌスについても同様である。プリニウス〔『博物誌』第35巻第3章〈17-18〉の伝えるところによれば、アガイウス・カエサルの使節のポンティウス——私は、彼がキリストを磔刑にした者ではないかと疑っているが——は、アタランテとヘレネの画像によって情欲を強く燃え立たせ、もし漆喰の性質が許したのであれば、それらを壁から引き剥がそうとするほどだった。別の者は、善きフォルトゥナの像に恋い焦がれた（アイリアノス『奇談集』第9巻第37章）、また別の者は、善き女神の像を恋い焦がれた。そして、身体のかなる部分もまた恥辱に欠くことはない。「陵辱へと急かされ」（と、かの者は語っている）〔セネカ『怒りについて』第11巻第18章〕、「そして、口さえも情欲から免れてはいない」〔アレクサンドリアのクレメンス『教道者』第3巻第3章〕。ヘリオガバルスは、身体のあるゆる穴から情欲を受け取ったと、ランプリディウスが彼の伝記において〈5. 2〉述べている。ホスティウスという者は鏡を作らせ、設置させたが、彼自身が男に身を任せるときには、反対側に、この男娼のあるゆる姿態が鏡の中に見えるようになったのである。そして彼は、男娼の一物の偽りの大きさを真実のものとして喜び、また同時に男と女に身を委ねたのであるが〔セネカ『自然の諸問題』1〈.16. 1-2, 7〉〕、それは語るにも恥ずかしく、忌まわしいことである。こうして、プルタルコス〔〈『対比列伝』〉第2巻「グリュロス」〕において、グリュロスがオデュッセイアに反駁したことは、明らかに真実である。すなわち、この時代まで、我々の間では、男が男を愛することも、女が女を愛することもなかったが、あなた方の間では、多くのこのようなことを、記憶に残る著名な者たちが行っていた。凡庸な者たちは除くとして、ヘラクレスは鬚の生えていない者を追い求め、仲間も友人も見捨てた。あなた方の欲情はその自然の限界の内に拘束されることができず、氾濫する河川のように、性愛の中で、本性の恐るべき放埒、動揺、混乱を生み出す。というのは、男

は山羊、豚、馬と交わり、女は野獣への狂気じみた愛によって燃え盛り、その結果、ミノタウロス、ケンタウロス、シルヴァヌス、スフィンクスなどが生まれたのである。しかし私は、必ずしも万人によって知られることが適切ではない事柄を、非難することによって教示し、あるいは公に持ち出すことのないように（それゆえ私は、ロデリクス [『女性の医学一般について』] 第1巻第15章とは異ならぬ理由によって、学識者だけに向けて書こうとしたのである）、また、軽薄きわまりない才知や邪悪な精神に恥辱に満ちた罪を知らしめないように、これ以上は、不潔な事柄によって汚すことはしたくない。

ようやく、人間男女に特有の英雄的愛が往々にして憂鬱症の原因となり、その愛は、その誉れ高き名称より、むしろ燃える情欲と呼んで然るべきである、という点にまで辿りついた。ノーマルで、まともな愛もあることを認めねばならない。それは、クリストバル・フォンセカが証するとおり、人の本性にかなった、女性から離れられないようにと、男たちの心を捉える見えない罠 [『愛の円形闘技場』第4章、クルティウスのラテン訳による]、極めて魅惑的、秘されて、堅固な特質をもった、強力な誘惑であり、強大な力であって、生きている男は誰もそれを逃れることができない。「愛の力を感じない者は石か獣かである」[エネア・シルヴィオ・ピッコローミニ書簡集] 112]。人ではなく、木の塊か、まさに石の塊、神格かネブカドネザルか、頭には瓢箪、心には南瓜で [テルトゥリアヌス『格言集』第4巻「マルキオン駁論」第40章]、そのような者は愛の力を感じたことはなく、滅多に見られない稀有な生き物、ある時代に一人現われればよし、その者は

見たこともない娘に対して愛に燃える。

[ユウェナリス〈『諷刺詩集』4.114〕]

というのも、「我々は誰でも一度は愛に狂う」〈パティスタ・マントヴァーノ『牧歌』「ファウストゥス」177〉からであり、[チョーサ]が言うように、老いも若きも愛に溺れ〈『カンタベリ物語』「騎士の話」954〉、例外はミネルヴァカムーサたちだけである。クピドは母親のウェヌスに「他の者はうまくいくのに、彼らだけはどうしても愛の矢が射抜けない」と嘆く [ルキアノス『神々の対話』〈「ウェヌスとクピド」〕]。しかし、結婚愛というこの愛だけは、結婚という形において男が抱く愛、普通の、まっとうな情念、「質料が形相を希求するように、女は男を求める」のである。結婚は立派なもの、楽園で神自身に指示された、至福の招命で、真の、平安、静穏、満足、幸福をもたらし、プルタルコス『愛をめぐる対話』でのアポロンがうまく表しているように、「それにもまして聖なる結ばれ方はないし、かつてもなく」、人が軋みも叱責もなく情愛深くあるべき生き方をするとき、結合が人間という類に不死性を生み出す」。

三倍もそれ以上も幸いなり、
壊れることなき絆が結び合わせ、

いかなる不和ありとて、最後の日の来る前に、
愛が解けることなき者たちは。

[ホラティウス 〈『カルミナ』 1. 13. 17-20〕]

セネカがパウリナと、アブラハムがサラと、オルベウスがエウリュディケと、アッリアがポエトゥスと、アルティミシアがマウソルスと人生を共にしたように、ルベニウス・ケラは、愛する妻エッネアと43年8か月連れ添い、一度も心を逸らせることはなかったと、なんとしても墓標に刻んでもらわねばならなかった。人の持ちうる最良のもの、それは、人と神との歓び、両者を育むウェヌス [ルクレティウス 〈『事物の本性について』 1. 1-2〕]、そして、確かに、他のすべての人の快樂にも優る何かが、女には秘されている [フォンセカ 〈『愛の円形闘技場』]。すなわち、男を惹きつける力、魅する資質、眼には見えない強力な動因、これに比べれば、この世には何の楽しみもない。まず夫が妻を支配するが、次には妻が夫の心の支配権を握り、夫は妻の僕となる。妻が夫の唯一の歓び、満足になるのである。かくのごとき幸せはなく、夫婦の間のこの愛のごとき大きな愛はない。美しい妻 [ホラティウス 〈『カルミナ』 2. 14. 21-2〕] ほどの慰めはない。

すべからく愛は大いなるもの、だが公認の配偶者においてはさらに大いなるものなり。

[プロベルティウス 〈『詩集』] 4. 3. 49]

そのとき、人は最初愛したように、最後にも初めてのように愛するのである。

結婚した者たちは配偶者と一緒に歳を重ねる。

[シモニデス 〈正しくはセモニデス。『論攷』 71〕]

ホメロスが、10年連れ添ったのちのパリスにヘレネにキスをさせて、それによって、パリスがヘレネと結婚の約束をしたときと同じように熱く愛していたと表現しようとした〈『イリアス』 3. 442-46〉。そして歳をとって、互いを大切にするようになったとき、若いときのように言うのである、

妻よ、今まで生きてきたように生を生きよう、そして死のう。

寝室で始めた名にふさわしく、

時間の経過で我々が変化する日は来ないだろう。

僕は君にとっては「ダーリン」のまま、君は僕にとって「ハニー」でいてくれ。

[アウソニウス 〈『エピグラム集』 40. 1-4〕]

ずっと変わらない、そういうのが結婚愛であるべきだ。夫婦は肉体が一つなるゆえ、精神もひと

つであるはず、貴族の支配におけるごとく、合意は一つ、〈友愛の象徴〉ゲリオンのごとく、肉体も一つになり、二つの肉体に宿る精神も一つになって、同じものを求め、厭う。プルタルコスによれば、良き妻は、鏡のごとく、夫の顔や感情を映し出す。夫が楽しければ、妻は嬉しい。夫が笑えば、妻は微笑む。夫が悲しそうであれば、妻はその悲しみを共有し、一部を担う。こうして二人は互いに互いへの愛をもち続ける（『結婚訓』）。

老齢は僕を君への愛から引き離しはしない、
僕が、ティトノスになろうと、ネストルになろうと。

[プロペルティウス〈『詩集』〉2.〈25〉]

ローマでは「あなたがカイウスである限り、私はカイアでいます」[プルタルコス〈『ローマに関する諸問題』第30章、と、年老いた夫に敬意を払ったように、妻の方も夫に対して同様である。

男が泉の恵みを授かって、「若い妻を愉しみ、妻の方は夫に対して愛らしい雌鹿、美しい小さな鹿となり、それゆえ夫がずっと妻を喜びとする」ならば（『箴言』5.〈18-19〉）、真に幸ある状態である。しかし、人間の婚姻の愛は、節度なく節制もなく、限界を知るとは思えない。婚姻の結ばれの枠中に納まることなく、その相手は一人に留まることはなく、さ迷い、彷徨し、権勢を振るい、際限なく、抑えること叶わず、破壊的な情念である。時として、この燃える欲情は結婚後に荒れ狂い、その場合には「嫉妬」と表現されるのも尤もである。かつてはときどき英雄的憂鬱症と呼ばれ、その後そう呼ばれているが、競争相手同志にも発展し、強姦や近親相姦や殺人まで生じ、マルクス・アントニウスは妹ファウステイナに、カラカラは義母ユリアに、ネロは母親に、カリギュラは姉妹に、キュネラスは娘のミラに等々、強要した。しかも、それは血縁、年齢、性別、その他いかなる関係にお構いなしである。思慮分別が備わらぬうち、年を重ねぬうちは、この欲情が荒れ放題の者もある。ペトロニウスでのクアルティッラは、処女だった時の記憶がなく、チョーサのバースの女房は自慢する。

十二のころから、
教会の入り口で、五人の男と寝ちまったさ。

〈『カンタベリ物語』「バースの女房の話」46〉

アレティネス・ルクレティアは、24歳になるまでに千回以上も処女を売ったが、まだ傷物になっていないと願っているような者には事欠かないとはっきり言おう [カスパル・フォン・バルト『淫蕩の教育、ラテン語訳』]。売春婦のラハブは10歳からすでに自称あばずれ、斥候を匿ったのはわずか14歳の時で（『ヨシュア記』2）、ヒュー・ブラフтонはそれを立証し [『聖書の調和』]、イエズス会士セラリウスがこれに同意した（『ヨシュア記註解』〈第2巻〉第2章第6問）。一般的に女性は14歳でいわゆる思春期に達する、あるいはユリウス・ポルクスなどはアリストパ

ネスを引いて発情期に達すると言うが（『オノマスティコン』第2巻第3章）、そののち女性は身を捧げるようになり、なかにはただ荒れ狂う者もある（エピクテトス〈『提要』第42〉）。レオ・アフリカヌス曰く、アフリカでは、14歳の処女を見出せる男はほとんどいない。14歳の娘はもはや処女ではなく、当代のイングランドでは、10代に達して未婚のままにいたる娘などいない（〈『アフリカ全土についての書』第3巻126葉）。中年の女性の、この類の濡れ場などは記すにも値しない。

私に百の舌があったとしても、百の口があったとしても。

〈ウエルギリウス『農耕詩』2.43〉

いかなる口も十全に明らかにすることはできない。あらゆる物語は、男性と女性の——たとえばネロの、ヘリオガバルスの、ポノスの——飽くなき情欲に満ちている。「カエリウスはアウフィレヌスに、そしてクインティウスはアルフィレナに恋い焦がれている」[カトゥルス〈『カルミナ』100.1-2〕]。彼らは他の男の妻を求めて（エレミヤが〈『エレミヤ書』第5章8で嘆いているように）肥えた馬のごとくいななき、あるいは、町の雄牛のようにさまよい、処女と寡婦の略奪者となる——我々の偉大な男たちの多くが行なうように。ソロモンの叡智はこの情欲の炎の中で消え、サムソンの力は弱まり、ロトの娘たちにおいては敬虔さはすっかり忘れられ、エリの息子たちにおいては聖職の真剣さも（『サムエル記上』2.22）、崇敬すべき老齢さも、スザンナに暴行しようとした長老たちにおいては忘れられ、アブサロムの継母に対しては息子としての義務も（『サムエル記下』16.21-22）、アモンの姉妹たちに対しては兄弟愛も忘れられた。人間的な、そして神的な法律、規律、勧告、神と人間への恐れ、公正な、そして不正な手段、名声、幸運、恥辱、不面目、名誉は、愛の狂気に抗することも、それから逃れることも、それに耐えることもできない。「愛はすべてに打ち勝つ」〈ウエルギリウス『牧歌』10.69〕。いかなる紐もいかなる綱も、愛が撚り糸によってなしうるほどに、強く引っ張ることも、しっかりいわえるもできない。赤道下の焼け焦がす光線であれ、あらゆる海を凍らせる北極圏の極限の冷氣であれ、冷たい地帯でも灼熱の地帯でも、死すべき人間たちのこの熱情、狂気、猛威を避け、あるいは退けることはできない。

ああ、狂った者よ、おまえはどこに逃げるのか、避難所はないのに。

おまえがタナイス川に逃れても、愛はおまえを追いかけるだろう。

[エウリピデス〈正確には、プロペルティウス『詩集』2.28.1-2〕]。

女性の自然の理に反する、飽くなき情欲 [ステファヌス〈「ヘロドトス弁護」〕] については、いかなる都市が、いかなる国が嘆かないであろうか。母と娘はときどき、同じ男への愛に溺れ、父と息子、また主人と従者は同じ女への愛に溺れる。

——しかし愛は、放逸な情欲は、
地上に、純潔で無垢なものを残すであろうか。

いかなる誓願や誓約の不履行、憤怒、溺愛、狂気を私は数え挙げることになろうか。だが、このことも若者においては、いわば、いまだに血気盛んな者においては我慢しうる。しかし、愛に溺れる愚かな老人を、色香に迷った老人を見ることよりも厭わしく、滑稽なことは——とはいえ、一般的なことは——あるだろうか。誰がこれほど激烈になろうか。

その年齢で愛することを始めるならば、彼らははるかに激しく錯乱する。

[プラウトゥス]

ある者たちは若かった時よりもさらに愛に溺れる。いかに多くの弱った、白髪の、粗暴な、不格好な、腹の出た、背の曲がった、歯の抜けた、禿げた、目のかすんだ、不能の、不潔な老人たちが、いまだにあらゆる場所において戯れているかを見ることか。ある老人は若い妻を娶り、別の老人は宮廷人を娶るが、そのとき、彼は敷居を越えて脚を上げることがほとんどできず、片方の足はすでにカロンの渡し船の中であり、彼の関節は震え、足は通風である。彼の頭の中では常に分泌物が流出し、「咳が続き、視野は狭まり、耳は聞こえにくく、息は臭く」[キプリアヌス]、彼の湿気はすべて乾いて、消え失せ、唾を吐くこともできないだろう。すっかり子どもに戻り、自分で身支度できず、自分で肉を切り分けることができないが、しかし、娘たちのことを夢見て、憧れるのであり、このことよりも見苦しいことはありうるだろうか。それは男性においてよりも女性においていっそう酷く、彼女は（プリニウスの見解によれば〔『書簡集』〕第8巻〈18.8〉「ルフィヌス宛」）「年月が経て、久しく寡婦で、かつては人の親で、年甲斐もなく結婚を求めているように見えるが」、皺のよった老婆で、見ることも聞くことも、歩くことも立つこともできず、ほぼ骸骨で[エラスムス『痴愚神礼讃』〈31〉]、魔女で、ほとんど感覚もない。彼女はギャーギャーと叫び、種馬、闘士を必要とする。彼女は再び結婚し、若い男の妻となる必要があり、またそうなるだろう。この男は彼女を見るのも嫌だが[エネア・シルヴィア・ピッコローミニ〈『エウリュアルスとルクレティア』序言〉]、彼女の財産が目当てである。彼女の姿を恐れているが、それは、彼女の名声への先入観、彼女自身の零落、友人たちの悲嘆、彼女の子どもの破滅のゆえである。

しかし、愛のこの力と効果について詳述し、描写することは、太陽の前に一本の蠟燭を置くことである。愛はあらゆる種類と条件の人間たちに荒れ狂うが、だが、最も際だっているのは、若く陽気で、花盛りの年齢で、高貴な生まれで、優しく育てられたような者たち、気安く気ままに生きているような者たちの間である[同上]。この（我々の神学者たちが燃え上がる情欲と呼んでいる）理由のゆえに、この「獸的で狂気の愛」[フォレストゥス〈『医学的な観察と治療』10.29〉、プラトン]は、私がすでに述べたように、我々の医者たちによって英雄的愛と名づけられており、そして、サヴォナローラが呼んでいるように[『大いなる処方』第6論攷第1章第11項

「主要な病気について」、「高貴な愛」という、より誉れ高い名称が、それに付与されている。というのは、高貴な男性と女性は、それを実践するのが常であり、頻繁にそれに罹っているからである。アヴィケンナは『医学典範』第3巻第1部第4論考第23章において、この情念を「イリシ」と呼んでおり、そしてそれを、「ある疾患、すなわち憂鬱症的な苦痛、すなわち精神の苦悶」と定義しており、「それにおいて、男は自分の恋人の美、仕草、振る舞いについて常に思いをさせ、それをめぐって思い悩んでいる。（サヴォナローラ『主要な医術』第6論攷第1章第11節「頭部の病」が付け加えているように）精神は意を尽くして熱心に、彼女を獲得し享受しようと欲しながら、いつも狩猟家たちが自らの娯楽、欲望について、自らの黄金と財産に思い悩んでいるように、彼は自らの恋人をめぐって苦しみ続けている」。アルナルドゥス・デ・ヴェッラ・ノーヴァは、英雄的愛についての自著の中で、「自らが欲するものを獲得するという確信あるいは希望を伴った、それについての不断の思案」と定義しているが、この定義に彼の注釈者〈タウレックス〉はけちをつけている。というのは、不断の思案とは「類」ではなく、愛の一つの兆候であり、我々は、愛するものと同様に、嫌い恐れるものについても不断に考えるからであり、そして我々は、多くの事柄を、それを獲得するという望みもなしに切望し、欲求するからである。シャルルド・ロルム〈『アポロンの称讃』〉は、「愛は病気か」、この英雄的愛は疾病なのか、と問いながら疑問を提示している。ユリオス・ポリュデウケスは『オノマスティコン』第6巻第44章において、それを次のように定義している。愛に陥った者たちは病気に罹っているようなものであり、「奔放で、好色で、多淫であり、愛に陥った者は、真に罹患している」。アルナルドゥス〈『英雄的愛について』2〉は、それを不適切にも、精神よりもむしろ身体の疾患と呼び、キケロは彼の『トゥスクルム談論』〈4.35.75〉において、それを精神の狂乱の疾病と定義し、プラトン〈『パイドロス』265A〉はそれをまさに狂気と定義し、フィチーノは彼の『〈プラトン「饗宴」〉註解』第12章において、それを一種の狂気と定義しているが、それは「多くの者たちが女たちに夢中になった」（『エズラ記』4.26）からである。しかし、ラーゼス〈『諸区分の書』10〉は「憂鬱な情念」と定義しており、そしてほとんどの医者も、それを憂鬱症の一種、すなわち（諸兆候によって現われるような）一属と見なしており、そして別に取り扱っている。私は彼らに従って、この愛のあらゆる種類について論じ、いくつかの原因について検討し、その兆候、前兆、前触れを示し、そしてより容易に治癒されるようにするつもりである。

ところで、罹患している箇所は、アルナルドゥスが想定しているように、「前頭部の湿気が欠如している部分である」が、彼の注釈者は否定している。ランギウスが『医療書簡集』第1巻第24章において、この情念は肝臓において燃え上がり、そして心臓において保持されると述べている。「最初、眼から、我々のスピリトゥスによって運ばれ、肝臓と心臓において、想像によって燃え立たされる」。格言にあるように、「肝臓が愛することを強いる」。アナクレオンのクピドが言うように、「彼は肝臓を介して中心を打つ」。このような理由のゆえに、おそらくホメロス『オデュッセウス』〈11.576-579〉、オウィディウス『変身物語』4〈457-458〉は、嬉々として、（ラトナに恋した）ティテュオスの肝臓が、冥府で昼夜を問わず、二頭の禿鷹によってつばまれ続

けるようにしたのである。「というのは、このように恋に落ちた若い男たちの腸は、愛によって不断に苛まれるからである」。ゴルドニウスは『医学の百合』第2部第2章〈1.20〉で、「睾丸を直接的な起因、すなわち原因とし、肝臓を付帯因と見なすだろう」と述べる。フラカストロ『共感と反感について』14〉はこの点でゴルドニウスに一致しており、「それゆえ、最初に欲情の想像があり、勃起などがある」。グスタヴィニウスは『〈アリストテレス「問題集」の前半の10区分についての〉註解』第4区分第27問題において、「それがもっとも性欲を刺激する部分と呼ぶのは、精子の射出がないかぎり、燃え盛る欲望は止まず、情欲の不断の想起も止むことはない」と付け加えている。しかし、正確には、それは他のすべての憂鬱症と同様に脳の情念であり、汚れた想像が原因である。そして、ヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデ（彼はこの性愛について夥しく書いている）は『脳の疾患について』第19章においてそのように考え、それを脳の疾患の一つと見なしている。メランヒトンは『魂について』[諸疾患についての章]において、肝臓を罹患する部分と考える人々に反駁しており、そして、グアイネーリオは『処方』第15論考第13・17章において、多くの者はすべての疾患を心臓に帰しているが、それを脳に関係づけている。フィチーノは『プラトン「饗宴」註解』第7章〈7〉において、血液を罹患する部分とするであろう。ヨハネス・フライタークは『医学の夜』第74章において、四つすべて、心臓、肝臓、脳、血液は罹患しており、しかし主要な部分は脳に集中していると想定している。すなわち、それは害された想像作用であり、想像作用と理性がともに悪しき影響を受け、彼の誤った判断と、彼が欲するものについての不断の思案のゆえに、彼は憂鬱症的であると真に言われうる。もし愛が暴力的なもので、あるいはその疾患が根深いものであるならば、私が先に確定したように、想像作用と理性はともに、最初に前者が、次に後者が悪しき影響を受けるのである。

第2節 第1項

英雄的愛の原因、
気質、満腹、怠惰、場所、気候等。

全原因のうち、最も遠くから影響するのは星辰である。フィチーノ曰く、ホロスコープにおいて金星が獅子宮にあって、月と金星とが同じ星位に位置する場合、あるいは金星の気質をもっている場合には、この種の燃える欲情に傾きがちである[『プラトン「饗宴」註解』第19章〈正しくは第7話、第9章〉]。プルタルコスは占星術に基づいて、生誕において合にある火星と金星は、互いに扇情的であり、女性の場合には蓮葉女である[『いかに青年は詩に耳を傾けるべきか』(4)]。そのことは、チャーサのバースの女房が次のように自白している。

ええ、わたしゃ、自分の心のままに従いましたさ、
わたしの星位の力でね。

〈『カンタベリ物語』「バースの女房の話」前口上〉

だが、私が今までに読んだ占星術に関わる金言では、カルダーノの言が最も記憶に値する。それゆえに彼が、無礼な修道士マラン・メルセンヌ『誕生星位諸問題』第3章]やその他の人たち（カルダーノには誰だか思い当たっていたのだが）によって手厳しく非難されたのだが、私には、偏見などない、まったく正しく、明らかで明白なことと思われる。カルダーノは、彼の言う8番目の生誕図〔〈メルセンヌ〉『プトレマイオス「第4章」註解』バーゼル1553年版]において、彼自身次のような叙述をしている。すなわち「金星と土星と水星とが合で、土星が水星の影響を最も受ける位置にあるとき、私を執拗に性愛へと思い致させ、それゆえ、私は心休まることがない」と、そして「行為で満たされ得なかった快樂や、叶って行為してしまい恥じている快樂を思っては絶え間なく苦しむこととなるが、快樂を絶えず思うことで、その快樂への欲望を誤魔化した」とも少し後で書いている〔バーゼル版、445葉]。また別の箇所では、「月と水星の力が優勢で、土星の光がそれに加わったゆえ、私の性は深いが淫らで、私は汚い情動に身を捧げ、卑しい身となった」と述べる。そして、このためにカルダーノはメルセンヌに誹謗されることになった。彼自身が曰くに、結局、古のナジアンゾスのグレゴリオスが弟子のキロに言ったのと同じことを言ったのだが。グレゴリオスが言ったのは「秀美の女性たちが私の前に現われ、その稀有な雅さと目を見張る美しさが、私の誠実さの真なるかを試した。そして私は密通といった恥ずべき行為は避けはしたのだが、それでも心に秘かな思いを抱くことで、処女の清純の花を汚してしまった」というものであった。誕生星位において、金星が男性宮にあり、かつ土星の家にいる、もしくは衝の位置にある男性は、より強い欲情に捉われている。プトレマイオスは『テトラビプロス』において、このことについての自分の考えに関して、なお多くの警句を書いているが、それは長い間の実践で疑いもなく堅固なものとなり、多くの経験によって完璧なものとなった。プトレマイオスの注釈者カルダーノは、そのように言っている。トマーズ・カンパネッラは『占星術』（第4巻、第8章、第4・5論攷）において、狂える愛する男を表現する多くの警句を、他の誰よりも書き溜めていて、それらは、誰でも望めば読むことができる。手相占師は金星線、金星丘から大抵の占いをする。その結果について、お望みなら、テスニエル、ハーゲンのヨハン、ルドルフ・ゲッケル（子）、その他を参照いただきたい。医者は完全に気質や体液から判断する。フィチーノの『プラトン「饗宴」註解』〈第6話〉第9章によれば、粘液気質の者は体質的にめったに憂鬱症に罹らないが、一旦かかると決して治癒することはない。尤も、鼓脹質やヒポコンドリア由来のものは、すべての憂鬱患者の中で、この性愛の弱点に陥りやすい。バラスコン・ドゥ・タラントは、そういった患者は想像力が強いゆえにそうなるのだと言い、ボダンはガスゆえだとし、ド・ゴルドンは、種（たね）と、精気、すなわち種の原子ゆえで、これが患者に烈しく狂おしい感情を掻き立てるとする。愛に走りやすい若者が多血質と考えられるのは容易で、ルキアノス曰く、悪気なく「目にするものすべてに愛の発作を惹き起こす」〔『愛の対話』]。持続勃起症は体液気質に拘わらず常なることなのである。同じルキアノスの書の中で、好色な若者テオメストゥスは、そういったことすべてが自分において確認できると認め、「私は極めて好色に生まれついているので、

海の砂や空から降ってくる雪を数える方が、私の色事の数々を数えるよりたやすいであろう」と言っている。「クピドは、その矢をすべて私に向けて射、私はあれこれの愛に惑わされ、一つの愛の次に別の愛が、そしてすぐにまた次の愛が、というわけで、一つが終わったわけでもないのに次の愛に憑かれ、終わったはずの愛の相手が一番美しく、今の相手が一番好きといった具合。ヒュドラの頭のように私の愛は増え続け、イオラオスだってどうすることもできない。私の眼は、涙に潤んだ、愛の駆け込み寺にして聖域なるゆえ、美しいものをことごとく惹き入れるが、決して満足することはない。これがウェヌスのいかなる怒りなのか、私には解らない。ああ、どれほど彼女の怒りを買って、かくも痛めつけられるのか。私はいかなるヒッポリユトスだというのか。いかなるテルキーネスが私の守護神だというのか」。あるいは、それは生まれつきの欠陥、遺伝的情念なのか。アナクレオンの作品『『カルミナ』第32番』でも、ギリシアに20人、コリント、テーベ、レスボス、ロードスにそれぞれ15人、イオニアにはその2倍、カリアには3倍、全部で2万人の愛人を同時にもっていたと激白する人物が登場する。「もし、すべての葉を……」と。

もし、あなたが、すべての樹々の
葉を集めることができるなら、
すべての海の
砂を数えることができるなら、
私の愛の一つ一つを
私は、あなたに数えて見せましょう。

彼の眼は天秤ばかりのようで、どちらにも傾き、どの娘の顔を見ても、そちらを見る。彼の心は風見鶏のようで、感情は火口はくちのよう、いやむしろナフサそのものというべきか、美しいもの、可愛い微笑、女性の好意には何でも火を燃え立たせる。グアイネーリオは〈『処方』第15論攷、第14章で、こういったことすべてを辜丸の熱に帰し、フランス人のフェランは『愛の憂鬱症』（本書は私の著の第3版が出てから入手した『憂鬱の解剖』初版出版の7年後の1624年にパリで出版された）で、「すなわち精子を多く含む精液のようなものとして」と、原子を含む種（たね）に帰した。アリストテレスにも「もし、種が放出されなければ、性欲は治まりえない」（『問題集』第4項、第17〈正しくは26〉問題）と、同様の記述がある。それゆえに、丈夫に生まれ強健な身体をもった若い男は、性欲に逆らえないのである。エルコレ・サッソーニアも本質的に同じような言葉を書いている。しかし、たいていの場合、私が思うに、若くて性欲が強くて、ただただ肥り、心煩いもなく、繁茂した牧草地で育つ家畜のように怠惰で人付き合いのない人間が、もっとも愛に捉われやすい。彼らは、グェスタヴィーノがケンソリヌスを引用しているように、必ずや「雄山羊となる」のである。

悦ばしい状況の極みのときこそ、心を捉えられやすい。

豊かな土地にあつてこそ、小麦が実るように。

[オウィディウス『恋愛術』〈1. 359-60〉]

我々が生きている場所で、その気候、空気、それらが合わさってできる特質が重要である。ガレノス曰く、ペルガモンの近くミュシヤでは、密通する者はほとんど見られないが、ローマでは、快楽の溢れる地として、多く見られる（『治療術、グラウコンへ』）。その昔コリントが有名であったのは、その類が悉くたくさんあったからで、毎日すべての地区のどの門からも流れ込んでくる他国人を楽しませる機会が、その場所にはあったからである（ゲルベル『ギリシアの英知点描記』）。そこのウェヌスの神殿では1,000人の売春婦が身を売ったと、ストラボン〈『地誌』8.6.20〉が記し、その中にはライスや、もっと有名な娼婦たちもいた。あらゆる国からの人たちが、まるでウェヌス派とでもいうかのように、そこに集った。熱い南の国では情欲が強く、北の方に住む人たちより色欲に耽るが、トルコ、ギリシア、スペイン、イタリア、その他その位の緯度の国ではそうだと、ボダンが一般的なこととして論じている（『歴史認識方法論』第5章「脆弱アジア地域」）。同様の論放の中で、スペインのパレンシア、イタリアのカプアのように、稔多く豊かで味覚豊富な土地を、キケロは「**驕奢の住処**」と名付け、ハンニバルの兵士たちが眼にしているのだが、エジプトのカノープス、シュバリス、フェニキア、バイイ、キュプロス、ランパスコスなども然りである。ナポリでは、大地の稔りや心地よい空気が肉体を弱め、その組成まで変えてしまう。それゆえ、フロルスが「**パッコスとウェヌスの戦い**」と呼ぶが、フォリエッタはそれを讃えている。イタリアやスペインでは、ローマやフィレンツェといった大きい町にそれぞれ売春宿があり、それらの町の9万人の住人のうち、1万人が高級娼婦だったとも言われている。それでも、しかるべき階級のすべての男たち個人個人に愛妾がいて、密通や姦通がこれほど当たり前のところも他にはなく、「**町全体が売春宿**」。これほど多くの刺激があるところで、いかにして誠実に生きていけようか。若者の力（その大きさや自由さを言っているのだが）と、罪の免責が結びつけば、すべての類の悪徳に必ずや裂け目が生じ、如何なる怒りが噴き出すことか。プラトン主義者テュロスのマクシモスが述べるように「**情欲には、いかなる不道徳、性急、放蕩、不身持、奔放なものがついてまわることか**」。そういう人間は情欲から免れえない。というのも、王侯や立派な位の人たちには、通常、こういったことについて良心の咎めなどなく、スパルティアヌスの詩に登場する売春婦のように、「**したいことを何でも意のままにする**」。また、それを公言し、いかなるあり方にせよ恥じるより、むしろプロクルスのように自慢しさえする。プロクルスは、いかに名だたる、その手のことを成し遂げたかと [ランプリディウス〈ウオピスクス『フィルムス、サトゥルニヌス、プロクルス、ボノソスの障害』12.7)」、ローマの友に手紙を書いたのである。ニコラス・サンダーズはヘンリ8世について、（どれくらい真実なのか解らないが）「**美しい少女を眼にすれば、ほとんど欲しいと思ったし、欲しいと思えば、ほとんどすべて手に入れた**」[『ヘンリ八世伝』]と述べている。このことは、高位の人たちの間では、極めて当たり前のことではあるが、なかでも突出したものではあった。サルダナパルス、メッサリナ、それにナポリのジョヴァンナ1世は

卑しい身分の男女とは比較にならず、古代のソロモンは1000人もの妾を抱えていた。アハシェロスにはお抱えの宦官たちがいて、見張る者たちもいた。ネロはティゲッリヌスを、そして女術や取り持ちをも抱え、トルコ人やロシア人やムガル人への支配者、モロッコのシャリフ、サファヴィー朝ペルシアのソフィなども、現代の王族たちに少しも引けを取らない。ジョーヴィオは「国中でひととき美しいすべての娘たちから、皇帝のために一人が選ばれ、彼が選ばなかった娘たちを諸侯たちが貰う」（『各国氣質記』『モスクワ』）と言う。我々が兵士たちを選ぶように、彼らは娘たちを強引に集め、国中であらん限りの稀有な美しさの娘を選ぶが、そうしたからとて、彼らは、密通、近親相姦、同性愛、男色、その他外道の淫欲から逃れることはない。従って、王侯、高位の者たちが、若くて、富み、栄え、食に恵まれ、そのくせ怠惰であれば、誠実に暮らして、激情に駆られたり不都合な燃える情欲に走ることなく生きることは、ほとんど不可能だと、結論として言うことができよう。

閑暇は最初に王たちと幸福な諸都市を破壊する。

[カトゥルス「レスビアへ」〈『詩集』51.15-16〉]

怠惰はすべてを崩壊させ、「愛は虚ろな心を支配し」〈オウィディウス『恋の歌』1.1.26〉、愛は怠惰な者の中で君臨する。「アンティポよ、おまえは愛で溢れている」〈テレンティウス『ボルミオ』163〉。もしおまえが何もなさなかったならば、

嫉妬あるいは愛によって、おまえは惨めな者に貶められるだろう。

[ホラティウス『書簡集』1.2.37]

おまえは嫉妬、欲情、その他の情念によって引き裂かれることだろう。「人間は何も行なわないことによって、悪しく行なうこと学ぶ」。アリステレスも類似したことを述べている。「マッチや火口が火をおこすように、怠惰な者は愛に陥る」〔『政治学』8.23〈正しくは3〉〕。

「なぜアエギストゥスが姦夫になったのかと尋ねられる」〈オウィディウス『恋の治療』161〉。なぜ、アエギストゥスは女術なのか。おまえがその理由を問うまでもない。イスメノドラはパソコンを誘拐した。アウロラがケパロスに行なったように〔パウサニアウス『ギリシア旅行記』〈1.3.1〉〕、女が男を強奪した。「溢れる財力が女を男のように振る舞わせる」ことは驚くべきことではない、とプルタルコスは〔『愛の対話』の中で〕述べている。彼女は裕福で、幸運で、陽気で、このような場合に男たちが行なうことを——ユピテルがエウロパに対して、ネプトゥヌスがアミュモネに対して行なったように〈ヒュギヌス『神話集』169〉——まさに行なうのである。したがって、詩人たちはすべての牧夫を恋する者に化し、歌と戯れに没頭させるのは当然だった。彼らはこのような無為な生を送っていたからである。というのは、愛とは、テオプラストス〔ストバイオス『選文集』62〕が定義しているように、「無為な魂がもつ感情」だからであり、あるいはセ

ネカ〈『オクタウィア』562-63〉が述べているように、愛は「若さから生まれ、幸運の女神の財貨の中で、贅沢と無為によって養われ、育まれる」からである。それゆえに、医者ド・ゴルドンは〈『医学の百合』〉第20章第2節において、この病気を高貴さに固有の情念と呼ぶことになった。さて、もし弱い判断と強い把握が併発したならば、彼らは抵抗しうるだろうか、とエルコレ・サッソーニアは述べている。サヴォナローラはその抵抗をほとんど「修道士、托鉢修道士、そして敬虔な人々」だけに認めている。「というのは、彼らは孤独に生き、潔癖に暮らし、何も為さないからである」。そして、彼の言葉も当然である。というのは、いかにして彼らは他の道を選びえたであろうか。

食餌だけが愛を惹き起こすことができる。無為に生き、満足して暮らしている若い男や若い女が、いかなる身分に属していようが、愛に陥らないことを見るのは稀なことである。アルキビアデス〔プルタルコス『アルキビアデスの生涯』〈8〉〕は、常に奔放な若い女性と戯れており、出費において節度がなく、装いに放縦で、いつも愛に陥っていたが、それはなぜだろうか。彼は食餌にあまりにこだわり、宴会にあまりに頻繁に、過度に出席したからである。聖ヒエロニムス〈『エレミヤ記註解』5.29.1〉が断言しているように、「無頓着のあるところ、情欲が支配する」。これらのすべてを、チャーサーの「バースの女房の話」〈「前口上」465-66〉が思いのままに確証している。

だって、寒さが霰を生むように、きっと
酒好きの口には色好みの尻尾がついているものよ。

とりわけ、シバリス人とフェアキス人が幾度も行なっているように、選り好みの食餌によってそれを助長し、勝手気ままに食べ、自ら進んでは好色な食べ物以外のものを口に入れない場合には、第一に、品質の良い葡萄酒、豆、実、巧みに調理され、たっぷり胡椒をまぶされた、あらゆる種類の根、他に庭園のアーティチョーク、レタス、フユガラシ〔オウィディウス〈『恋愛術』2.415〕〕、カブ、ネギ、タマネギ、松の実、甘いアーモンド、舐剤、シロップ、ジュース、カタツムリ、貝、周到に準備された魚、小鳥、動物の睾丸、卵、さまざまな種類の香辛料、そして柔らかなベッド、クッションなど。そして、医者が、性愛の不能に苦しむ者たちに処方し、饗宴におけるいわば催淫剤として、上記のものよりもはるかに美味な食物として供する、ほとんどすべてのもの。蜂蜜酒、妙味で外来の果実、香料、ケーキ、多くの料理に合わせて変化に富む、甘美さにおいて葡萄酒にも勝る、絞ったジュース、そして、台所、薬局、あるいは製作所が産みだすことができるほとんどすべてのもの。そして、クレセイダのために玉葱と蝸牛で自らを治した者のように〔ペトロニウス〈『サテュリコン』130〕〕、放蕩者たちはこれらの食物の大部分を自らに詰め込み、性愛への準備を行ない、この格闘技のために自らを鍛えるのであるから、彼らは惨めに恋い焦がれ、激しく狂乱しないということがありうるだろうか。「燃え立つ胃袋は情欲へとすぐに陥る」とヒエロニムス〈『書簡集』69.9〉は述べている。「昼食のあとで、カリュロエを与えよう」〔ベルシウス『諷刺詩』3〈1.134〉〕。そこで、誰が自らを抑えることができるだろうか。アウグスティ

ヌス〈『説教集』33〉は、「葡萄酒を放縱を促すもの」[シラキデス〈『集会の書』19.2)」、情欲の火口ほくちと呼び、ベルナルは媚びへつらう悪魔と呼び、アリストパネスはウェヌスの乳と呼んでいる。ヒエロニムス〈『書簡集』54.「オリンピアへ」9〉は、「エトナ山やウェスウィウス山も、五臓六腑を葡萄酒で満たした若者たちほどに、灼熱で燃えたぎってはいない」と付け加えている。それゆえ、葡萄酒のおかげで、かつてランベサクスはプリアposによって聖別され、オルベウス〔『〈ウェヌス〉讃歌』1.7〕においては、ウェヌスが崇敬すべきバッコスの朋友と言われている。もしウェヌスが純粋で、混ぜ物のない葡萄酒を与えることができるならば、「しかし、バッコスよ、おまえで満ちた私を、おまえはどこへ引きずるのか」[ホラティウス『カルミナ』3.15〈1-2〉]。我々は、その他のものにこれほどの狂気を、これほどの激情を期待するだろうか。ミエデス〔『塩について』1.21〕は、塩を、時ならぬ情欲を呼び起こすのが常であるものの中に挙げています。「そして、女たちは塩を食することによって、より淫乱になると主張している。それゆえ、ウェヌスは大洋から生まれたと言われるのである。

なぜヴェネツィアには、何千もの娼婦がいるのだろうか。

明らかな理由は、ウェヌスが海から生まれたことである。

[コルンマン『処女性について』]

そして、ここから、オケアノスの妻である、豊穡な母のサラケアが生まれる」。そして、おそらく「好色な」(salax)という言葉は「塩」(sal)に由来している(ミエデス『塩について』)。葡萄酒に浸したクベバを東インド人は情欲を掻きたてるために用い[ガルシア・デ・オルタ『香料の歴史』1.28]、スラックスの根をアフリカ人は用いた[レオ・アフリカヌス〈『処方』9]。中国の根は同じ効力をもっており、インドからもたらされた同様な薬草のことを、ジャンバッティスタ・デッラ・ポルタは『自然魔術』第2巻第16章において言及しており、それについてはテオプラストス〈『植物誌』9.20)も触れている。しかし、これと同様なものは無数に、ラーゼス、マッティオーリ、ミザルドゥス、その他の医師たちの中に見いだされるが、それゆえ私は、それらに関して、困難な事柄に熟達していない者は打ち込まないように、むしろシュルティス[海峡]と岩礁を、人知を尽くして逃れるように注意したのである。

*太字表記は原文がラテン語、ギリシア語であることを示す。

*原注には、典拠の該当箇所と、テキストの引用が見出される。典拠は[]内に示し、テキストは訳出に反映し、必要と思われる部分は[]に補った。

*その他の補注や訳出の補完は〈 〉に示した。

テキスト

- (底本) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Oxford English Text)* (6 Vols.).
Ed. by T. C. Faulkner, N. Kiessling and R. L. Blair. Oxford: Clarendon Press,
1989-2000.
- (参考) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Facsimile) (The English Experience)*.
Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1971.
- Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy; What It Is, with All the Kinds, Causes,
Symptomes, Prognostickes & Severall Cures of It*. Ed. with an Introduction
by Holbook Jackson. New York: Vintage Books, 1977.
- Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy: now for the first time with translation
and embodied in an All-English text*. Ed. and trans. by R. Jordan-Smith and F. Dell.
London: Routledge, 1931.

既訳

- 「第1部 第1章 第1節」 『京都府立大学学術報告 人文・社会』 第59号 2007所収
- 「第1部 第1章 第2、3節」 『京都府立大学学術報告 人文・社会』 第60号 2008所収
- 「第1部 第2章 第1節」 『京都府立大学学術報告 人文』 第61号 2009所収
- 「第1部 第2章 第2節」 『京都府立大学学術報告 人文』 第62号 2010所収
- 「第1部 第2章 第3節 第1-10項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第63号 2011所収
- 「第1部 第2章 第3節 第11-14項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第64号 2012所収
- 「第1部 第2章 第3節 第15節」 『京都府立大学学術報告 人文』 第65号 2013所収
- 「第1部 第2章 第4節 第1-6項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第66号 2014所収
- 「第1部 第2章 第4節 第7項-第5節、第3章 第1節 第1・2項」
『京都府立大学学術報告 人文』 第67号 2015所収
- 「第1部 第3章 第1節 第3・4項-第3節、第4章」
『京都府立大学学術報告 人文』 第68号 2016所収
- 「第3部 第1章 第1節 第1項序-第2節 第2項」
『京都府立大学学術報告 人文』 第69号 2017所収

(2018年10月1日受理)

おかむら まきこ (文学部 共同研究員)
いとう ひろあき (専修大学 教授)